

# 袖ヶ浦市上泉遺跡

—一般県道横田停車場上泉線県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1 9 9 3

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

そで が うら し かみ いざみ い せき  
**袖ヶ浦市上泉遺跡**

—一般県道横田停車場上泉線県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—



1 9 9 3

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

東京湾に面した袖ヶ浦市は、房総半島のほぼ中央に位置し、千葉県の政治・工業・経済・文化の一翼を担ってきました。現在、この一帯は千葉県新産業三角構想に基づくかづさアカデミアパークをはじめとして、東京湾横断道路、東関東自動車道千葉・富津線などの大規模な事業が計画され、大きな発展が期待されています。これに伴い、交通量の増大が見込まれるため、新たな交通網の整備が望まれるようになってきています。この一環として、県道横田停車場上泉線道路改良事業は道路拡幅を目的として計画されました。

一方、房総半島は自然環境に恵まれ、先人の残した数多くの遺跡が知られています。袖ヶ浦市周辺にも数多くの遺跡が所在し、古くから生活に適した環境であったことを物語っています。千葉県教育委員会では、この道路改良事業に先立ち、事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県君津土木事務所をはじめ関係諸機関と慎重に協議を重ねた結果、事業の性格上工事計画の変更は避けられないとの結論に達し、やむなく発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが行うこととなり、平成3年3月から12月まで実施しました。その結果、先土器時代の石器集中地点をはじめとして弥生時代から古墳時代にかけての集落の一部分とみられる竪穴住居跡が検出されました。これらは、周辺地域の文化の変遷を解明するうえで大変貴重な資料といえます。このたび、整理作業を終えて報告書を刊行するはこびとなりました。本書が学術資料としてはもとより、広く文化財の保護と普及に役立てば幸いです。文末になりますが、本書の作成にあたっては、発掘調査から整理作業を経て刊行にいたるまでの間ご尽力・ご協力をいただいた千葉県教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 千葉県文化財センター  
理事長 奥山 浩

## 例　　言

1. 本書は、千葉県土木部道路建設課による一般県道横田停車場上泉線県単道路改良事業に伴う袖ヶ浦市上泉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成にいたる業務は、千葉県の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 発掘調査は平成2年度に確認調査、3年度に本調査と2か年にわたり、それぞれ下記の職員が担当した。なお、上泉遺跡の調査コードは、481-009である。

平成2年度　調査部長　堀部昭夫　部長補佐　佐久間　豊　班長　郷田良一  
技師　四柳　隆

平成3年度　調査部長　天野　努　部長補佐　阪田正一　班長　深澤克友  
主任技師　加藤正信

4. 整理作業から報告書の作成にいたる諸作業は、平成4年度に実施し、調査部長　天野　努、部長補佐　深澤克友の指導のもとに班長　鈴木定明、班長代理　加藤正信、技師　四柳　隆が担当した。
5. 本書の編集は、先土器時代および縄文時代を四柳が、その他を加藤が行った。
6. 平成3年4月1日付けて、君津郡袖ヶ浦町が市制を施行して袖ヶ浦市となったが、本書では文献に明記されている場合を除いて、統一して袖ヶ浦市の名称を用いることとした。
7. 本書の挿図において使用した地図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行地形図（1/25,000・上総横田）をそのまま使用

第2図 袖ヶ浦市発行地形図（1/2,500・No.27・28・32・33）を縮小して使用

8. 本書の図版1で使用した空中写真は、平成4年、京葉測量株式会社によって撮影されたものである。
9. 発掘調査から報告書の刊行にいたるまで、下記の諸氏、諸機関より多大なるご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県君津土木事務所  
袖ヶ浦市教育委員会、財団法人君津郡市文化財センター

## 目 次

序 文	
例 言	
目 次	本文目次、挿図目次、表目次、写真図版
I 序 章	1. 調査にいたる経緯 ..... 1 2. 遺跡の位置と周辺の地理的環境 ..... 1 3. 周辺の歴史的環境 ..... 2 4. 調査の経過と方法 ..... 4
II 先土器時代	1. 先土器時代の概要 ..... 11 2. 立川ローム層基本層序 ..... 12 3. 第1ブロック ..... 12 4. 第2ブロック ..... 14 5. 第3ブロック ..... 16 6. 第4ブロック ..... 17 7. 第5ブロック ..... 20
III 繩文時代	1. 繩文時代の概要 ..... 23 2. 陷 穴 ..... 23 3. 遺構外出土の遺物 ..... 25
IV 弥生時代	1. 弥生時代の概要 ..... 26 2. 竪穴住居跡 ..... 26
V 古墳時代	1. 古墳時代の概要 ..... 39 2. 竪穴住居跡 ..... 39 3. 溝 ..... 47
VI 歴史時代以降	1. 概 要 ..... 49 2. 竪穴住居跡 ..... 49 3. 溝 ..... 51 4. 土 坑 ..... 61 5. ピット群 ..... 66 6. 表採遺物 ..... 66
VII ま と め	1. 先土器時代 ..... 68 2. 繩文時代 ..... 69 3. 弥生時代から古墳時代 ..... 69 4. 歴史時代以降 ..... 70

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の地形(1:25,000)	3	第32図 0 0 8 出土遺物	.....	35
第2図 調査範囲と周辺の地形(1:5,000)	5	第33図 0 0 9 · 0 1 0 (住居跡)	.....	36
第3図 先土器時代調査地点(1:1,000) .....	9	第34図 0 1 1 (住居跡)	.....	38
第4図 基本層序	12	第35図 0 1 2 (住居跡)	.....	40
第5図 第1ブロック石器出土状況	13	第36図 0 1 2 出土遺物(1)	.....	41
第6図 第1ブロック出土石器	15	第37図 0 1 2 出土遺物(2)	.....	42
第7図 第2ブロック石器出土状況	16	第38図 0 1 3 (住居跡)	.....	43
第8図 第2ブロック出土石器	16	第39図 0 1 3 遺物出土詳細図	.....	44
第9図 第3ブロック石器出土状況	17	第40図 0 1 3 出土遺物(1)	.....	44
第10図 第3ブロック出土石器	17	第41図 0 1 3 出土遺物(2)	.....	45
第11図 第4ブロック石器出土状況	19	第42図 0 1 4 (住居跡)	.....	46
第12図 第4ブロック出土石器	19	第43図 0 1 5 (住居跡)	.....	47
第13図 第5ブロック石器出土状況	20	第44図 0 1 5 出土遺物(1)	.....	47
第14図 第5ブロック出土石器	20	第45図 0 1 5 出土遺物(2)	.....	47
第15図 上層遺構配置図(1:1,000)	21	第46図 0 1 9 · 0 2 0 (溝)	.....	48
第16図 0 0 1 (陥穴)	23	第47図 0 1 6 · 0 1 7 (住居跡)	.....	50
第17図 0 0 1 出土遺物	24	第48図 0 1 7 出土遺物	.....	50
第18図 0 0 2 (陥穴)	25	第49図 0 1 8 (住居跡)	.....	51
第19図 遺構外出土遺物	25	第50図 0 2 1 (溝)	.....	52
第20図 0 0 3 (住居跡)	27	第51図 0 2 2 · 0 2 3 · 0 2 4 (溝)(1)	.....	53
第21図 0 0 3 出土遺物	28	第52図 0 2 2 · 0 2 3 · 0 2 4 (溝)(2)	.....	54
第22図 0 0 4 (住居跡)	29	第53図 0 2 3 出土遺物	.....	55
第23図 0 0 4 出土遺物(1)	30	第54図 0 2 5 · 0 2 6 · 0 2 7 (溝)	.....	56
第24図 0 0 4 出土遺物(2)	30	第55図 0 2 8 (溝)	.....	58
第25図 0 0 5 (住居跡)	31	第56図 0 2 9 (溝)	.....	58
第26図 0 0 5 出土遺物(1)	31	第57図 0 3 0 (溝)	.....	59
第27図 0 0 5 出土遺物(2)	31	第58図 0 3 1 (溝)	.....	59
第28図 0 0 6 (住居跡)	32	第59図 0 3 2 (土坑)	.....	60
第29図 0 0 6 出土遺物	32	第60図 0 3 3 (土坑)	.....	60
第30図 0 0 7 (住居跡)	33	第61図 0 3 4 · 0 3 5 (土坑)	.....	60
第31図 0 0 8 (住居跡)	34	第62図 0 3 6 (土坑)	.....	62

第63図	0 3 7 (土坑) .....	62	第66図	0 3 8 (ピット群) (2) .....	65
第64図	0 3 7 出土遺物 .....	62	第67図	表採遺物 (1) .....	67
第65図	0 3 8 (ピット群) (1) .....	64	第68図	表採遺物 (2) .....	67

## 表 目 次

第1表	主な工事用基準杭座標値 .....	7
第2表	遺構番号対照表 .....	8
第3表	クラムシェル確認調査出土石器観察表 .....	11
第4表	第1ブロック出土石器観察表 .....	14
第5表	第2ブロック出土石器観察表 .....	16
第6表	第3ブロック出土石器観察表 .....	17
第7表	第4ブロック出土石器観察表 .....	18
第8表	第5ブロック出土石器観察表 .....	20
第9表	0 0 1 出土石器観察表 .....	24
第10表	縄文時代遺構外出土石器観察表 .....	25

## 写 真 図 版

- 図版1 遺跡周辺空中写真
- 図版2 先土器確認グリッド土層断面、第5ブロック遺物出土状況
- 図版3 調査区発掘状況
- 図版4 0 0 1 全景、0 0 2 全景
- 図版5 0 0 3 全景
- 図版6 0 0 5 (0 0 4) 全景、0 0 5 全景
- 図版7 0 0 6 · 0 0 7 全景、0 0 8 全景
- 図版8 0 0 9 · 0 1 0 全景
- 図版9 0 1 1 全景、0 1 2 · 0 1 3 全景
- 図版10 0 1 2 · 0 1 3 全景、0 1 3 南側部分
- 図版11 0 1 3 遺物出土状況
- 図版12 0 1 4 全景、0 1 5 全景

- 図版13 019・020全景
- 図版14 019、019全景
- 図版15 021全景、022・023北側部分全景
- 図版16 022・023南側部分全景、023北側部分全景
- 図版17 023北側部分全景、022南側部分全景
- 図版18 024南側部分全景、025全景
- 図版19 025・026・027全景、026・027全景
- 図版20 028全景、029全景
- 図版21 030全景、037全景
- 図版22 第1ブロック・第2ブロック・第5ブロック出土石器
- 図版23 第4ブロック・縄文時代出土石器
- 図版24 003・005・008出土遺物
- 図版25 013出土遺物
- 図版26 012・015・023出土遺物
- 図版27 (参考) 文脇遺跡小銅鐸出土土坑墓全景、同出土小銅鐸

# I 序 章

## 1. 調査にいたる経緯

近年の交通網の発達には目を見張るものがあり、多くの人々がその恩恵に浴し便利な生活を享受してきている。一方それに応じてさらなる交通網の発達が求められるようになり、数多くの道路建設を含む交通網の整備が行われてきている。今回、東関東自動車道千葉富津線の建設が計画されるにあたり、周辺地域の道路交通網の整備も重要な課題となってきた。その一環として、一般県道横田停車場上泉線の道路改良事業が計画され、事業用地内の埋蔵文化財の所在の有無が千葉県土木部道路建設課から千葉県教育委員会に照会があった。千葉県教育委員会では埋蔵文化財の包蔵地が1か所所在する旨を回答し、それについて道路建設課と千葉県教育庁生涯学習部文化課との間で、埋蔵文化財の取扱いについて慎重に協議が行われた結果、事業の性格上路線の変更等による現状保存は不可能であり、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整った。発掘調査にあたっては、千葉県教育庁生涯学習部文化課の指導により、調査機関として財団法人千葉県文化財センターが指名され道路建設課との間で発掘調査に関する委託契約が締結された。

発掘調査は平成2年度に確認調査、3年度に発掘調査を実施し、平成4年度に整理作業を行い報告書を刊行した。

## 2. 遺跡の位置と周辺の地理的環境

千葉県南部の清澄山系に源を発して、房総半島中央を縦断する丘陵地を深く複雑に開析しながら北流する小櫃川は、袖ヶ浦市横田付近で蛇行しながら流路を西へ転換する。この横田付近の小櫃川は、豪雨のたびに氾濫をおこして流路をかえており、最も新しいところでは昭和47年の集中豪雨が知られている。地形図では現在でも旧河道を明瞭に確認することができる。横田以西では広大な沖積平野が形成されており、のどかな田園風景が展開している。この水田地帯に豊かな水利をもたらした小櫃川は、木更津市金田付近で東京湾に流入している。

今回調査した上泉遺跡は、小櫃川の支流である松川によって開析された支谷に南面する斜面に立地し、行政的には袖ヶ浦市永吉字下山台3-9他に位置する。松川の支谷は、小さな支流による小支谷が樹枝状に複雑に入り込んでおり、奥深くまで谷津田として利用されている。遺跡は谷津の南側に面する斜面のわずかな平坦地に形成されており、標高は40~42m、松川付近との比高差は15~20mを測る。遺跡の背後には標高80mほどの丘陵地が続いている。遺跡の西側には標高約40m、幅約400m、長さ約300mの舌状台地が西へ向かってのびており、その先端は小櫃川沖積地へ下る急斜面となっている。

### 3. 周辺の歴史的環境

上泉遺跡の周辺には、各時代にわたって多数の遺跡が周知され、また近年の開発に伴う調査事例の増加に比例して多くの重要な資料が提供されつつある。周辺のおもな遺跡としては次のとおりである。

#### ① 先土器時代

先土器時代については、あまり報告されていない。これは市原市姉崎付近から袖ヶ浦市にかけてを境にして、基盤となる層に大きな変化があることが要因と思われる。すなわちこの境界線以南では硬質の岩盤が基盤となっており、立川ローム層の安定した堆積がみられないためかと思われる。今回の調査では、かなり良好な立川ローム層の堆積がみられたが、このあたりがほぼ南限であるといえよう。

未報告資料では、本遺跡よりやや北になるが、当文化財センターで調査した市原市ヤジ山遺跡<sup>(1)</sup>・袖ヶ浦市関畠遺跡等で先土器時代の良好な資料を検出している。

#### ② 縄文時代

縄文時代では中・後期を中心に著名な遺跡が分布している。また東京湾岸は貝塚が集中して分布することで知られているが、大規模な馬蹄形貝塚の分布は当地域をほぼ南限としている。特に著名なものとしては木更津市祇園貝塚<sup>(2)</sup>（中・後期）、袖ヶ浦市山野貝塚<sup>(3)</sup>（後・晚期）等が挙げられる。この他にも袖ヶ浦市飯富から大曾根にかけては、伊丹山遺跡をはじめとする縄文時代中・後期の遺跡が多数分布している。

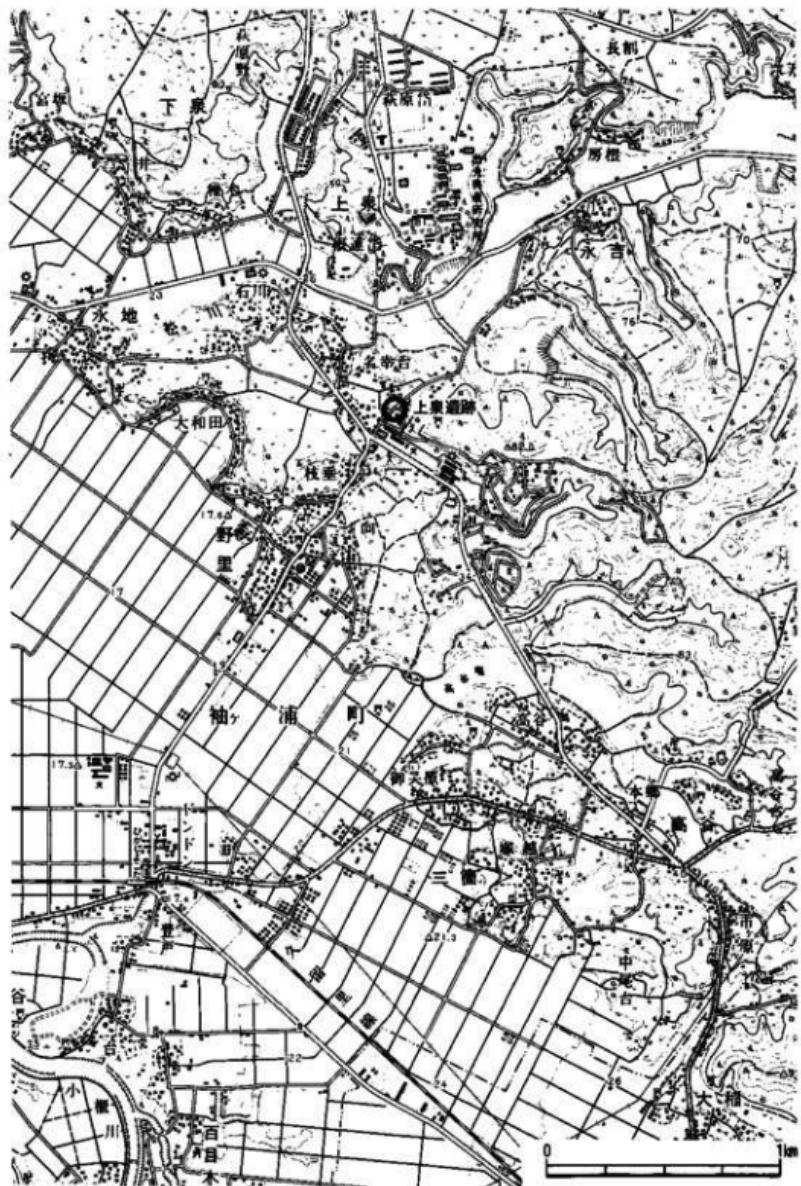
早期や前期の遺跡はあまり知られていないが、木更津市笠子付近には早期燃系文系土器群から沈線文系土器群を出土する遺跡がまとめて分布しており、また袖ヶ浦市三ツ作には茅山上層式を主体とする三ツ作貝塚が所在する。

#### ③ 弥生時代

周辺には、木更津市芝野遺跡<sup>(4)</sup>、袖ヶ浦市文脇遺跡<sup>(5)</sup>等著名な遺跡が多数所在する。当文化財センターで調査した芝野遺跡は、小櫃川の右岸、木更津市下望陀に所在する低湿地遺跡で、弥生時代の水田跡と、関連する遺構遺物を良好な遺存状況で検出した。文脇遺跡は、上泉遺跡群の一角に所在する集落跡で、小銅鐸を出土したことで知られている。

#### ④ 古墳時代

当遺跡の西側約500mには弥生時代の集落としてもとり上げた文脇遺跡が古墳時代前期から中期にかけての集落を構成し、東約2kmには桶爪遺跡<sup>(6)</sup>が所在している。古墳については、上泉古墳群が遺跡西側に所在するが、発掘調査がほとんど実施されていないので詳細は不明である。今回調査した上泉遺跡は、文脇遺跡と同一の台地上に位置し、遺構の時期も弥生時代から古墳時代にかけて中心とするものであるので、広くは上泉遺跡群のなかの文脇遺跡の一部と考えられる。



第1図 遺跡の位置と周辺の地形 (1:25,000)

## ⑤ 歴史時代

本遺跡の東約1kmの所在する永吉台遺跡群がまずあげられよう。台地上に営まれた平安時代の集落遺跡で、掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土坑墓・寺院跡・土器工房跡などが検出されている。また、さらに東側約3kmには萩ノ原遺跡<sup>[16]</sup>が所在し、平安時代の集落跡から寺院跡が検出されている。

## 4. 調査の経過と方法

今回の調査では、現道が生活道路として不可欠なものであったため、まず拡張部について確認・本調査を実施し、終了後に仮設道路を敷設して現道部の調査を行うという、いわゆるスイッチバックの方法を採用した。なお、現道部・拡張部とも幅6m程度と狭く、調査区が座標北に對して北東から南西へと斜方向に存在するため、基準点測量は行わず、既設の工事用基準杭を基準点として使用することとした。また、便宜上グリッド内には任意の基準点を設置し、拡張部は北東からA～M（しき工事用基準杭名称に使用されているため除く）、現道部は同じく1～26とよぶことにした。使用した杭の位置は第3図を、座標値は第1表を参照されたい。

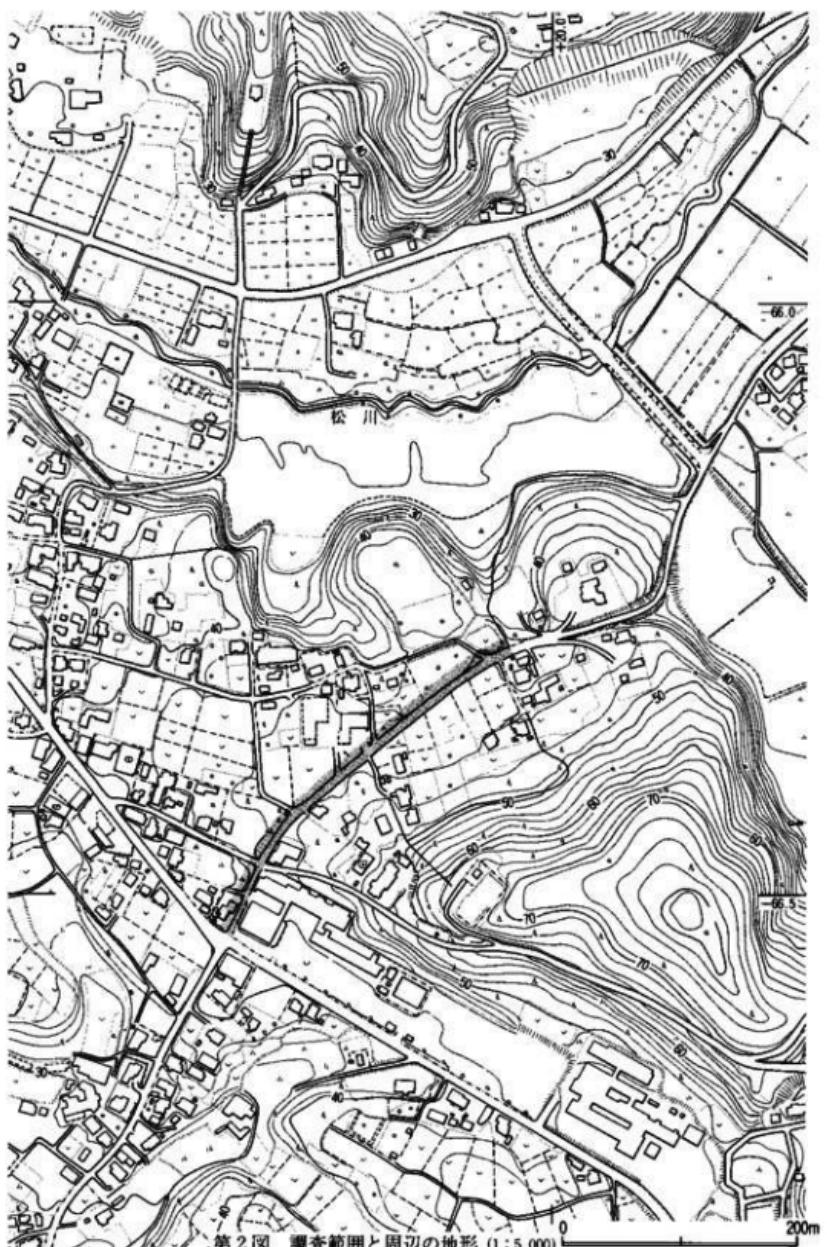
拡張部の確認調査は、平成3年3月1日より開始した。上層遺構については、幅1mのグリッドを設定し、調査期間が1か月と短かったことから、表土除去にはバックホウを使用した。表土除去完了後に精査および遺構検出に移行し、検出状況の実測を行った。調査区が幅約6m・長さ約300mと細長いうえに、現道部分に隣接して電信柱や道路境界標等が林立していたため、重機の使用にあたって安全面については特に留意した。

下層の確認調査はクラムシェルを使用して実施した。クラムシェルは、低湿地遺跡の確認調査のために導入され、昭和63年度より市原条里製造跡で使用した後、平成2年度から東関東自動車道（千葉・富津線）建設に伴う調査で、下層確認調査の省力化のために本格的に使用されるようになったものである。詳しい方法については先土器時代の項に紹介することとする。

調査期間が1か月と短かったうえに天候に恵まれなかつたが、調査補助員の皆様の努力により期間内に作業を完了することができた。

拡張部の本調査は平成3年4月より開始し、竪穴住居跡8軒・溝状遺構6条・先土器時代石器ブロック2地点等を検出して平成3年5月31日に終了した。

拡張部の調査終了後、仮設道路の敷設工事ならびに現道部の舗装・路床の撤去等の環境整備に6月から10月までの5か月を要したので、現道部の調査は改めて11月1日より開始した。拡張部の成果から、調査区ほぼ全域にわたって遺構が存在することが予想されたので、上層については確認調査を省略して表土除去を実施した。現道部はすでに電話線・水道管等の埋設物の掘削が行われており、遺存状況は良好ではなかった。発掘調査の結果、竪穴住居跡8軒・溝状遺構8条等を検出し、拡張部に比べ遺構総数ではやや少ないものの、まんべんなく分布してい



第2図 調査範囲と周辺の地形 (1:5,000)

ることが判明した。遺構の調査をほぼ完了した時点で下層の確認調査に移行し、21地点について人力でグリッドを掘削した。その結果No.8グリッドとNo.12グリッドで石器を検出したので本調査を行った。なお、拡張部で実施したクラムシェルによる確認調査の成果に基づき、石器出土地点の隣接部分についても本調査範囲に含めることとした。下層の本調査の結果、先土器時代石器ブロック3地点を検出し、12月25日にすべての作業を終了した。

註（1）（財）千葉県文化財センター平成元年度・2年度・3年度調査

村木正記「市原市ヤジ山遺跡第2黑色帯中の石器群」『研究連絡誌』第31号（財）千葉県文化財センター 1991

（2）（財）千葉県文化財センター平成3年度・4年度調査

（3）『祇園貝塚』千葉県文化財調査抄報第4集 千葉県教育委員会 1970

（4）『袖ヶ浦町山野貝塚』千葉県都市公社 1973

『袖ヶ浦市山野貝塚』千葉県教育委員会・（財）千葉県文化財センター 1993

（5）『袖ヶ浦町伊丹山遺跡』伊丹山遺跡発掘調査団 1979

（6）（財）千葉県文化財センター平成元年度・2年度・3年度調査

「木更津市芝野遺跡」『千葉県文化財センター年報No.17』（財）千葉県文化財センター 1992

（7）（財）君津郡市文化財センター昭和62年度～平成元年度調査

山本哲也「西上総における古墳時代中期の玉作－文脇遺跡の例を中心として－」『研究紀要V』（財）君津郡市文化財センター 1991

（財）千葉県文化財センター昭和63年度調査

「君津郡袖ヶ浦町文脇遺跡」『千葉県文化財センター年報No.14』（財）千葉県文化財センター 1989

（8）『桶爪』桶爪遺跡発掘調査団 1979

（9）『永吉台遺跡群』（財）君津郡市文化財センター 1985

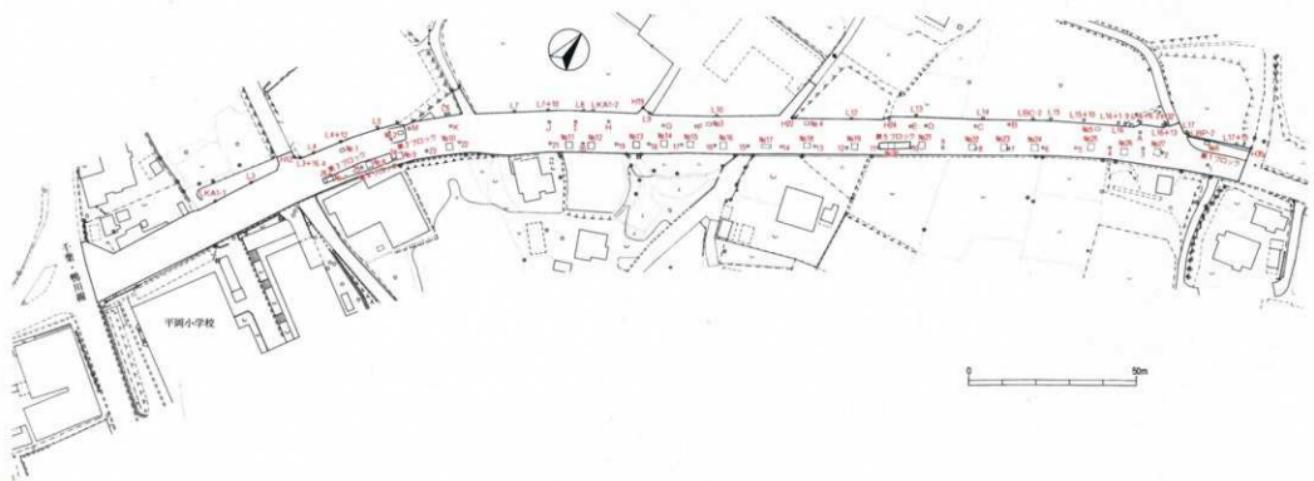
（10）『千葉県萩ノ原遺跡発掘調査報告書』日本文化財研究所 1977

第1表 主な工事用基準杭座標値

杭名	X 座標	Y 座標	杭名	X 座標	Y 座標	杭名	X 座標	Y 座標
L KA 1 - 1	-66,492.217	19,730.828	L 8	-66,402.360	19,738.818	L 15	-66,482.217	19,730.828
L 3	-66,481.491	19,735.631	L KA 1 - 2	-66,400.495	19,801.237	L 15+10	-66,481.491	19,735.631
H12	-66,467.194	19,741.099	H19	-66,391.769	19,812.562	L 16	-66,467.194	19,741.099
L 3 +16.4	-66,466.276	19,742.501	L 9	-66,390.704	19,815.092	L 16+1.9	-66,466.276	19,742.501
L 4	-66,463.023	19,744.263	L 10	-66,378.655	19,831.056	L 16+6.2	-66,463.023	19,744.263
L 4+12	-66,452.256	19,750.407	H22	-66,365.283	19,849.066	L 16+13	-66,452.256	19,750.407
L 5	-66,445.157	19,754.710	L 12	-66,354.558	19,882.986	H32	-66,445.157	19,754.710
L 5 + 6	-66,440.042	19,758.275	H24	-66,347.318	19,872.383	L 17	-66,440.042	19,758.275
L 6	-66,429.335	19,768.097	L 13	-66,341.242	19,877.974	L S P 2	-66,429.335	19,768.097
L 7	-66,415.559	19,783.437	L 14	-66,329.431	19,894.122	L 17+15	-66,415.559	19,783.437
L 7 +10	-66,408.842	19,791.087	L B C 2	-66,320.269	19,906.177	H 35	-66,408.842	19,791.087

第2表 遺構番号対照表

報告書 遺構No.	性 格	時 期	位 置 (枕番号)	報告書 遺構No.	調査時 遺構No.	性 格	時 期	位 置 (枕番号)
第1 B ブレ1区	石器ブロック	先土器	L 17~H 35	0 1 8	0 3 4	堅穴住居跡	不 明	9
第2 B ブレ2区	石器ブロック	先土器	M	0 1 9	0 2 3	溝	古 墳?	21
第3 B ブレ4区	石器ブロック	先土器	26	0 2 0	0 2 4	溝	古 墳?	21
第4 B ブレ5区	石器ブロック	先土器	24~25	0 2 1	0 1 7	方形周溝遺構	歷史?	H
第5 B ブレ6区	石器ブロック	先土器	10~11	0 2 2	0 0 6	溝	不 明	B、5・6
0 0 1 0 1 2	竪 穴	縄文早	C~D	0 2 3	0 0 7	溝	不 明	B、5・6
0 0 2 0 3 2	竪 穴	縄文早	10	0 2 3	0 3 9	溝	不 明	B、5・6
0 0 3 0 1 1	堅穴住居跡 弥生(後)	C~D	0 2 4	0 1 0	溝	不 明	不 明	B・7
0 0 4 0 1 5	堅穴住居跡 弥生(後)	F	0 2 5	0 2 5	溝	不 明	不 明	13・14・15
0 0 5 0 1 6	堅穴住居跡 弥生(後)	G	0 2 6	0 2 6	溝	不 明	不 明	14
0 0 6 0 1 8	堅穴住居跡 弥生(後)	J	0 2 7	0 2 7	溝	不 明	不 明	14
0 0 7 0 1 9	堅穴住居跡 弥生(後)	J	0 2 8	0 0 1	溝	不 明	不 明	14
0 0 8 0 2 1	堅穴住居跡 弥生(後)	L~M	0 2 9	0 2 0	溝	不 明	不 明	L 16+3
0 0 9 0 3 0	堅穴住居跡 弥生(後)	11~12	0 3 0	0 3 6	溝	不 明	不 明	K・L
0 1 0 0 2 9	堅穴住居跡 弥生(後)	11~12	0 3 1	0 4 1	溝	不 明	不 明	8
0 1 1 0 3 3	堅穴住居跡 弥生(後)	9	0 3 2	0 2 8	土	境	不 明	18・19
0 1 2 0 0 8	堅穴住居跡 古墳中)	L 14	0 3 3	0 0 2	土	境	不 明	12
0 1 3 0 0 9	堅穴住居跡 古墳(中)	C・8	0 3 4	0 1 4	土	境	不 明	L 16+3
0 1 4 0 3 7	堅穴住居跡 古墳(中)	8	0 3 5	0 1 3	土	境	不 明	D・E
0 1 5 0 3 1	堅穴住居跡 古墳(中)	10	0 3 6	0 2 2	土	境	不 明	25
0 1 6 0 0 3	堅穴住居跡 不明	L 15	0 3 7	0 0 5	土	境	不 明	L-B C2
0 1 7 0 0 4	堅穴住居跡 不明	L 15	0 3 8	0 4 0	ビ ト	群	不 明	5~25



第3圖 先土器時代調查地點 (1:1,000)

## II 先土器時代

### 1. 先土器時代の概要（第3図）

拡張部の確認調査は、平成2年度に実施した。調査区は上層遺構の確認調査終了後、遺構の存在しない部分を選んで6地点を設定し、先述のクラムシェルで掘削した結果3地点で礫や焼跡を検出した。

クラムシェルは、本来低湿地遺跡の包含層の確認調査のために使用するもので、当文化財センターでも昭和63年度に市原条里制遺跡に導入して以来、多大な成果をあげている。低湿地遺跡で使用するクラムシェルは、土木工事用機械のバケットの一部を埋蔵文化財調査用に改良したかなり大型のもので、深さ約5mまで掘削可能である。

下層確認調査で使用するクラムシェルは、バックホウ(0.4)に新開発の専用バケットを取り付けた簡易なもので、掘削深度は約3mである。バケットのサイズは1m×2mの長方形が基本となっており、横に2回連続掘削することによって2m×2mのグリッドになる。平成2年度に東関東自動車道(千葉~富津線)建設に伴う埋蔵文化財調査事業に導入されて以来、下層確認調査の省力化や時間の短縮に大きな成果をあげている。

調査方法は、クラムシェルによって1回に5cm程度の厚さを掘削し、その排土中に含まれる石器を補助員が探すというもので、石器を検出した時点で掘削を中止する。オペレーターの習熟度や担当する補助員の人数によって多少の差はあるが、人力で掘削する場合と比べ約3倍の速度で調査が進捗する。特に深い層位に属する石器群の検出には大きな威力を發揮する。

第3表 クラムシェル確認調査出土石器観察表

No.	石 材	器 種	法 量 (mm)			重 量 (g)	備 考
			最大長	最大幅	最大厚		
1	チャート	礫	83.3	56.6	39.1	246.0	No. 1
2	安山岩	礫	97.2	92.0	51.5	466.0	No. 2 敷石か
3	砂 岩	礫	53.5	43.6	25.5	81.6	No. 2
4	砂 岩	焼 磚	104.4	50.9	30.0	203.6	No. 3
5	凝灰岩	焼 磚	74.6	68.0	53.9	243.0	No. 3

現道部の確認調査は、「2m×2mのグリッドを10mごとに1地点」という方針を基本に、21地点設定して、調査区南西側よりNo. 7~27と称することとした。調査範囲や攪乱の関係上、基準に沿わないグリッドも存在する。掘削は従来どおりの方法で人力で行った。

拡張部の本調査は、クラムシェルによる確認調査結果に基づいて平成3年度前半に実施したが、先述のNo. 6グリッド周辺で分布の拡がりを確認した。これを第1ブロックと称することとする。また、M杭とN杭の間で、上層遺構確認面精査中にソフトローム層につきささるよう

な状態で2次加工のある剥片が1点出土した。これは調査の結果単独出土であることを確認したが、一応ブロックとして扱うこととし、第2ブロックと称する。

現道部の本調査では、No.8およびNo.20グリッドで石器が出土し、本調査に移行した。これをそれぞれ第4・5ブロックと称することとする。なお、拡張部のクラムシェル確認調査で石器を検出した地点の隣接部分についても本調査を実施し、No.1グリッド隣接部分で2点の石器を確認した。これを第3ブロックと称することとする。今回の調査で以上の5地点を検出した。

なお、残念ながら発掘調査中に第1ブロックで出土した石器9点が盗難にあい、ここに紹介できなかったことを申し添えておく。

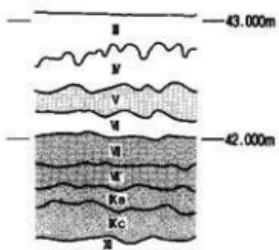
## 2. 立川ローム層基本層序（第4図）

現道部の確認グリッドのうち5地点でセクション図を作成し、その中で最も良好な堆積状況を示しているNo.12グリッド北壁のものを基本層序とした。

まずソフト化した部分をすべてⅢ層、第1黒色帯をV層、Ⅲ層とV層に挟まれた赤色味の強い部分をIV層とした。市原市南部から袖ヶ浦市にかけての地域では、概して第1黒色帯の黒色味が強い傾向が認められる。第1黒色帯直下にはATをブロック状に含むVI層が堆積している。ATの含有量は少なく、他の遺跡と比して暗い印象を受ける。

VII層の下位には第2黒色帯が堆積しており、上層の暗褐色土をVIII層、下層の黒褐色土をIX層とした。VII層では上部をVIII層、やや暗い下部をVII'層としたが、分層できない地点が多かった。いずれも少量のバミスを含有する。IX層は從来IXa層、IXc層とよばれる2層に分層した。どちらも多量の赤色スコリア粒子を含む。IXb層は確認できなかった。

本グリッドでは、IXc層直下に青灰色で粘性の強い武藏野ローム層（XI層）が堆積しており、I層に対比できる層は確認できなかった。他のグリッドでは20cmほどの厚みをもちや粘性の強い黄褐色土を確認しており、これをX層とした。



第4図 基本層序

## 3. 第1ブロック（第5～6図・図版22）

クラムシェル確認グリッドNo.6の成果に基づいて拡張し検出したもので、調査区の北東端にあたる。出土遺物はすべてVII層中から出土しており、さらに確認調査でも第2黒色帯以下からは遺物を検出できなかったため、本調査はIXa層上部まで掘削したところで終了した。なお、

隣接する現道部分はすでに現道部建設時に1m以上削平されており、立川ローム層がほとんど残存していなかったため本調査は行わなかった。

本ブロックでは、拡張した範囲から出土した石器のすべてを総称して第1ブロックと命名したが、これをいま仮に「大ブロック」と称することとすると、当ブロック中には3か所の「小ブロック」ともよぶべきブロックが存在している。すなわち1~18・19~16・21~25の3地点であるが、それぞれla・lb・lcブロックと称することとする。

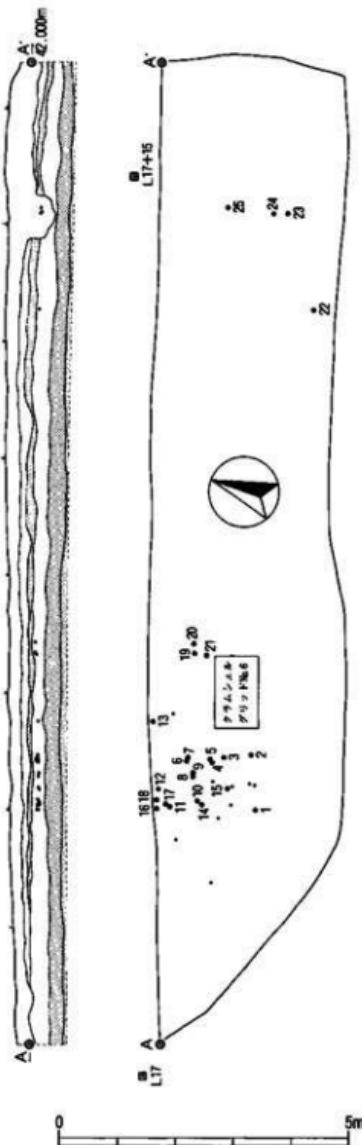
#### ① 1aブロック

クラムシェル確認グリッドNo. 6の西側に隣接する部分で、計18点がVII層中位から濃い密度で出土している。1点の安山岩製剝片を除けばいずれも黒曜石製の剝片ないし碎片である。

使用されている黒曜石の質は概して不良で、流紋岩の夾雜物を大量に含んでいたり攝理面を多くもっており、剝片剝離後に自然に折れている個体が多い。箱根か神津島産出の石材と思われる。盜難にあった9点も同一石材であった。出土状況からみて、当ブロックは今回の調査対象範囲よりさらに北側へ分布のひろがりを示すことが予想される。

#### ② 1bブロック

クラムシェル確認グリッドNo. 6 北隅付近のVII層最上部より、焼疊3点が出土した。19は硬砂岩、20は硬砂岩、21は凝灰岩で、いずれも破碎疊となっている。19および21では被熱による赤化が進んでいるが、20はあまり明瞭でない。21は被熱以前に磨石として使用さ



第5図 第1ブロック石器出土状況

れていた可能性があるが、被熱後に表面が荒れてしまっているため断言はできない。

### ③ 1c ブロック

クラムシェル確認グリッドNo. 6 の北東方向、6~7 m を隔てた地点で、黒曜石製剝片 2 点、碎片 2 点の計 4 点が出土した。層位的には 1b ブロックとほぼ同様で、V 層と VI 層の境界付近から出土している。密度は 1a ブロックと比較するとかなり薄いが、南側の、すでに削平された現道部の方向に広がりをもっていた可能性がある。

石材となる黒曜石の質は、1a ブロックと比較するとかなり良好ではあるが、一般的にみればやはり良質品とはいえない状況であり、22・24 とも剝片剝離後に折断されている。

第4表 第1ブロック出土石器観察表

No.	図No.	石 材	器 種	法 量 (mm)			重 量 (g)	備 考
				最 大 長	最 大 幅	最 大 厚		
1	4	黒 曜 石	剝 片	21.1	16.9	6.9	1.8	1a
2	8	黒 曜 石	剝 片	30.7	21.3	13.5	3.8	1a
3	2	黒 曜 石	剝 片	18.3	13.9	3.6	0.4	1a
4		黒 曜 石	碎 片	14.8			0.2	1a
5		黒 曜 石	碎 片	11.3			0.2	1a
6	5	黒 曜 石	剝 片	16.3	22.3	5.1	1.0	1a
7		黒 曜 石	碎 片	3.1			0.2	1a
8		黒 曜 石	碎 片	14.7			0.2	1a
9		黒 曜 石	碎 片	13.3			0.2	1a
10		黒 曜 石	碎 片	10.9			0.4	1a
11	10	黒 曜 石	剝 片	33.3	25.4	11.1	7.6	1a
12		黒 曜 石	碎 片	13.0			0.4	1a
13	7	黒 曜 石	剝 片	19.8	17.7	9.9	2.0	1a
14	1	黒 曜 石	剝 片	19.3	14.1	6.9	1.0	1a
15		黒 曜 石	碎 片	10.5			0.1	1a
16	9	黒 曜 石	剝 片	36.4	21.0	12.7	8.0	1a
17		黒 曜 石	碎 片	8.3			0.1	1a
18	11	凝灰岩	剝 片	21.2	18.9	8.5	2.2	1a
19		硬砂岩	焼 磨	36.1	26.6	44.1	45.6	1b
20		硬砂岩	焼 磨	78.9	62.6	36.9	147.4	1b
21		凝灰岩	焼 磨	48.8	71.1	28.7	175.6	1b
22	6	黒 曜 石	剝 片	15.3	20.5	8.8	2.0	1c
23		黒 曜 石	碎 片	12.9			0.4	1c
24	3	黒 曜 石	剝 片	19.6	16.7	7.4	1.4	1c
25		黒 曜 石	碎 片	20.4			0.4	1c

### 4. 第2ブロック (第7図~8図・図版22)

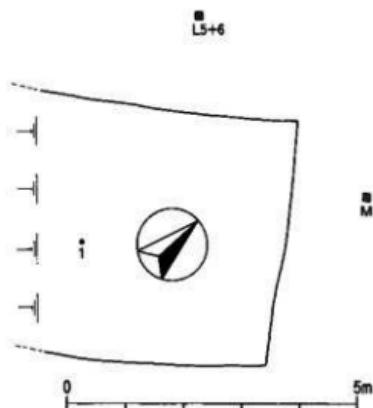
L15+6杭付近の上層遺構確認面精査中に、ソフトローム層に突き刺さるような状態でチャート製の剝片が 1 点出土した。この地点には調査以前に戦没者慰靈碑が建っており、出土地点西



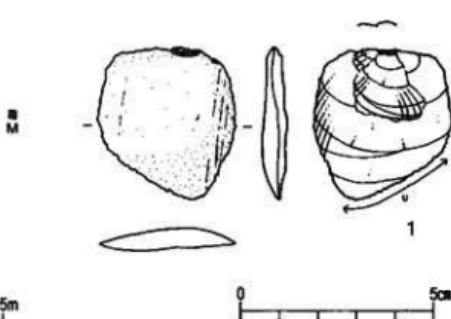
第6図 第1ブロック出土石器

側では自然の緩斜面を削って比高差70~80cmほどの基壇状に造成してあった。また、慰靈碑建立時になされたと思われる攪乱によって、ローム層は良好な状態を保っていなかった。トレンチの壁面についても、西壁は削平され、残る3面も多くが攪乱部分に当たっていたためセクション図を提示できない。分布の広がりも確認できなかった。

石材は色調暗緑色を呈する緻密で良質なチャートで、片面には滑らかな礫面が残存している。打面は線状を呈しており、対面するエンドには明瞭な使用痕をみることができる。



第7図 第2ブロック石器出土状況



第8図 第2ブロック出土石器

第5表 第2ブロック出土石器観察表

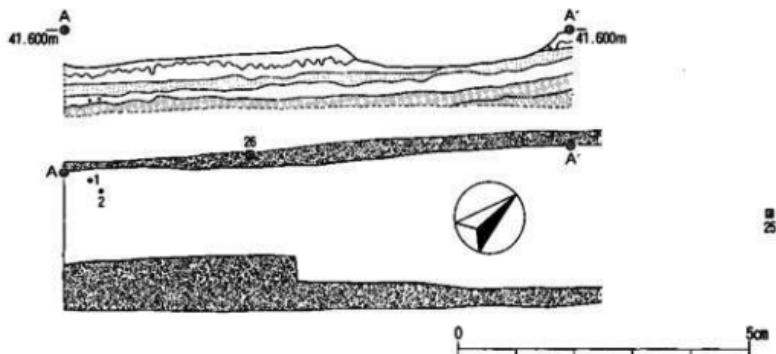
No.	石 材	器 種	法 量 (mm)			重量(g)	備 考
			最大長	最大幅	最大厚		
1	チャート	U剥片	38.8	35.7	6.5	9.6	

### 5. 第3ブロック（第9図～10図）

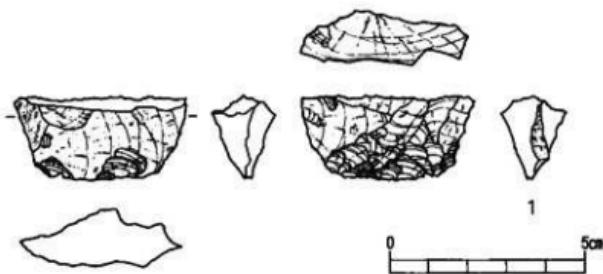
クラムシェル確認グリッドNo 1の成果に基づいて本調査に移行したところ、拡張部では分布の広がりを確認できなかったが、隣接する現道部でVI層より2点の石器を検出した。

1はチャートの剥片である。表面が黄褐色の石材を使用しており、摺理面を境に各所で折断している。下端にみられる剥離は、使用痕であるか2次加工痕であるか判然としない。ここではR剥片の可能性を指摘するにとどめておく。もう1点、同一母岩と思われるチャートの碎片が出土した。表裏面とも摺理面となっている。

出土状況からみて、さらに西側へ分布する可能性がうかがえるが、確認調査の段階で深くまで攪乱されていることが判明していたため調査を中止した。



第9図 第3ブロック石器出土状況



第10図 第3ブロック出土石器

第6表 第3ブロック出土石器観察表

No.	図No.	石 材	器 種	法 量 (mm)			重量 (g)	備 考
				最大長	最大幅	最大厚		
1	1	チャート	剥 片	21.0	44.1	16.2	12.4	R剥片か?
2		チャート	碎 片	21.3	11.6	3.9	0.8	1と同一母岩

## 6. 第4ブロック（第11図～12図・図版23）

現道部No. 8グリッドV層より石器を検出したため本調査に移行した。本調査ではⅢ～Ⅳ層で1点、V層上部で3点、VI層で2点、VII層で4点、計8点の石器を検出した。ここでもⅢ～IV層を4a、V層およびVI層を4b、VII層を4cと小ブロックに分けてよぶこととする。

なお、当グリッドの西側は第3ブロック本調査グリッドと連続しており、第3ブロックの東側と当ブロックの西側のセクションポイントは、レベル差はあるものの同位置である。

### ① 4aブロック

No. 8グリッドの西側約2mの地点で、Ⅲ層とⅣ層の境界付近のクラック帯中から、6に示

したチャート製の石核1点が出土した。

石材となるチャートは色調暗緑色を呈する非常に緻密なもので、第2ブロックⅢ層より出土したR剥片の石材と酷似している。あるいは同一時期に形成されたブロックであるのかも知れない。一部残存する縫面も、第2ブロックのものと似て非常に滑らかな肌をもっている。

### ② 4bブロック

V層～VI層にかけて出土した5点を一括して扱うこととする。ただし1については、3mほど隔てた地点で出土しており、出土層位もVI層中ではあるがかなり下部の層との境界付近であるので、あるいは別ブロックとして扱ったほうがよいのかもしれない。石材のチャートも2・3・6等と比較するとやや異なった様相を呈している。

1は黒灰色を呈する緻密なチャートを用いた横長剥片で、剥片剥離後に折断している。打面と対応する側縁は鋭利な刃状を呈しているが、使用痕等は認められない。

2・3はチャートの碎片、6はチャートの剥片で同一母岩と思われる。暗灰色を呈し、夾雜物を多量に含んでいるため大変もろい。この3点はいずれもV層の上部より出土している。

6は凝灰岩製の剥片で、表面側に剥片剥離後の2次調整痕がみられる。出土層位はVI層上部である。調査時に一部破損してしまったが、その断面から表面約0.1mmほどが風化のため淡黄色を呈しており、中心部は本来黒色であったことが観察された。

### ③ 4cブロック

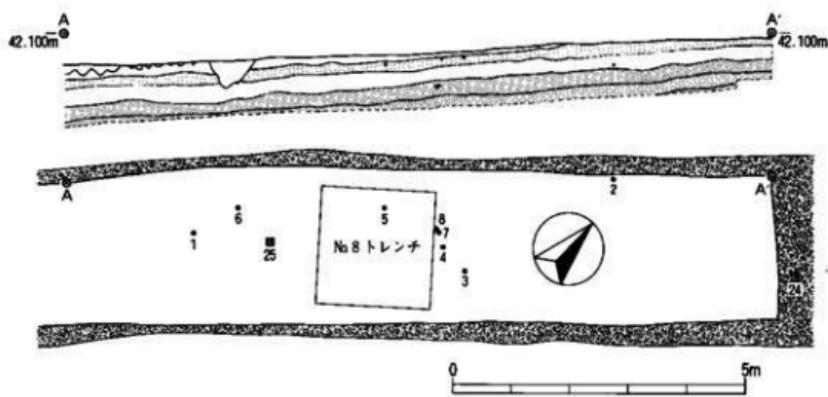
No.8グリッドの東壁付近のVI層中より、2点の石器が密接して出土した。

4は黒曜石製の剥片で、下端を折断した後に微細な剥離を施している。この剥離は通常楔形石器にみられるものとよく似ており、打面側も欠損しているので、あるいは楔形石器であるのかもしれない。夾雜物を少量含むものの、第1ブロックの黒曜石に比べて格段に良質である。

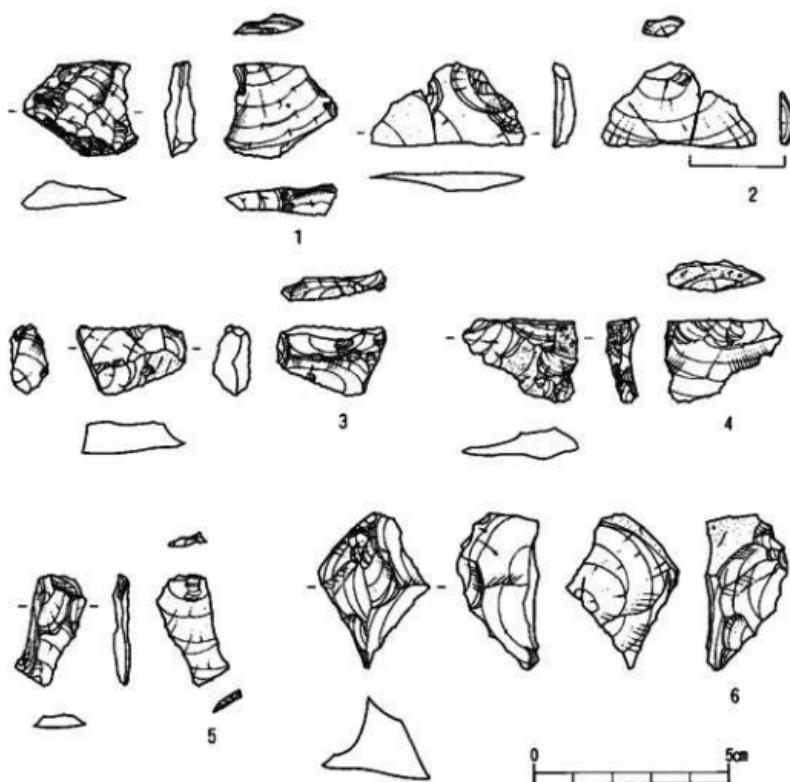
5は頁岩製の縦長剥片である。色調は黄褐色を呈しており、表面はややザラザラとしてあまり緻密でない。摺理面を多くもっており、そこを境に一部欠落している。

第7表 第4ブロック出土石器観察表

No.	団No.	石 材	器 種	法 量 (mm)			重量(g)	備 考
				最大長	最大幅	最大厚		
1	6	チャート	石核	39.4	21.1	20.5	14.0	4a
2	3	チャート	剥片	17.4	27.9	8.6	4.6	4b
3		チャート	碎片	11.9			0.4	4b同一母岩
4		チャート	碎片	16.8			0.4	4b同一母岩
5	4	チャート	剥片	20.8	29.5	8.3	3.8	4b同一母岩
6	2	凝灰岩	R剥片	21.2	39.6	5.7	3.6	4b
7	1	黒曜石	R碎片	24.2	29.0	8.3	4.0	4c
8	5	頁岩	剥片	28.0	18.2	3.9	1.4	4c



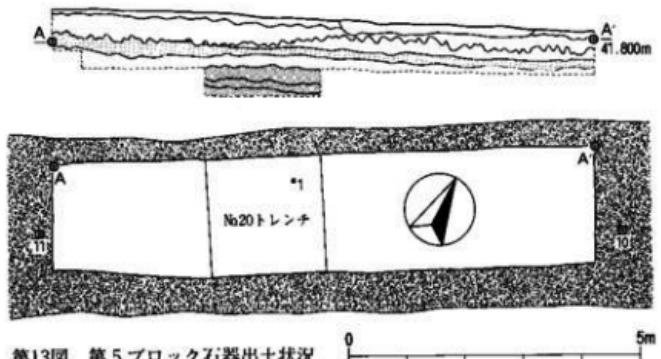
第11図 第4ブロック石器出土状況



第12図 第4ブロック出土石器

## 7. 第5ブロック（第13図-14図・図版2・22）

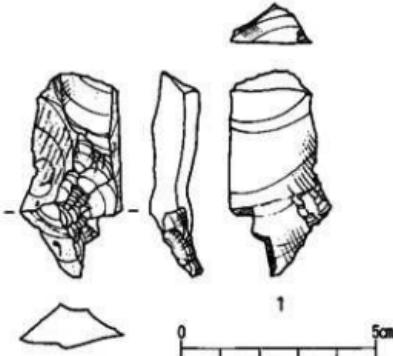
調査区のほぼ中央、10杭と11杭の間に設定したNo.20グリッドで、Ⅲ層とⅣ層の境界のクラック帯から頁岩の剥片が1点出土した。本調査では、10~11杭間のすべてを範囲と決定して掘削したが、分布の広がりはなく単独出土であることが判明したため、Ⅶ層上面を検出したところで調査を中止した。なお、No.20グリッドではⅦ層を明瞭に観察することができた。他の4ブロックは、調査区南西隅付近か北東隅付近の、いずれも松川支谷に面する斜面の肩の部分に存在していた。当ブロックおよびNo.12は台地中央の平坦部にあたり、Ⅶ層はこの部分にのみ堆積しているようである。



第13図 第5ブロック石器出土状況

出土した石器は第14図に示したものである。色調暗茶褐色を呈する頁岩で、第4ブロック出土の頁岩と比較するとかなり緻密であるが、摺理面を多数もっており、そこを境に欠損している。

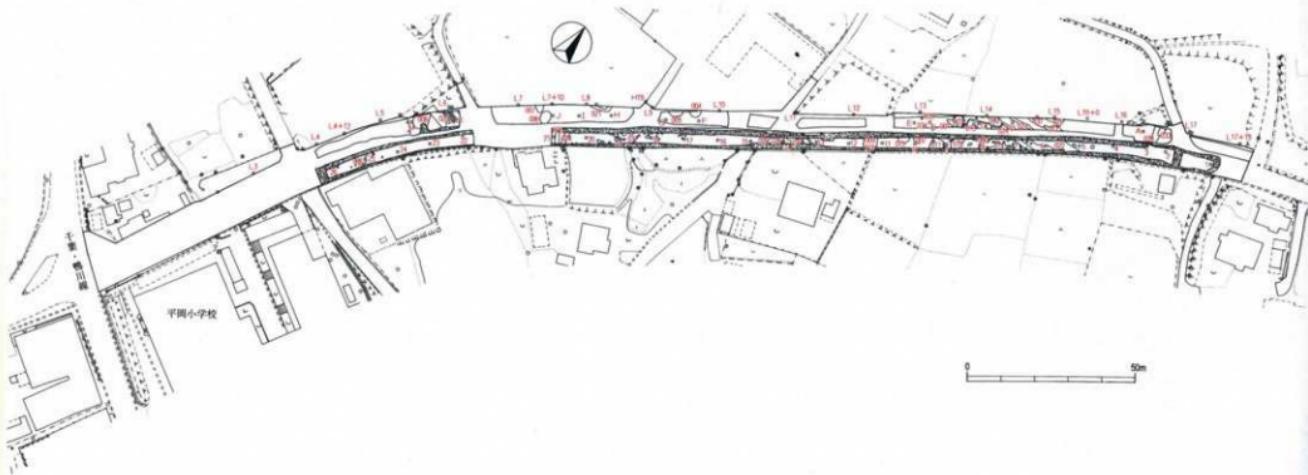
両側縁は、ともに銳利な刃状を呈しているが、使用痕等は認められない。表面の稜線の一部には叩き潰したような剥離がみられ、2次加工痕の可能性がうかがわれるが、ここではその可能性を指摘するにとどめておくことにする。



第14図 第5ブロック出土石器

第8表 第5ブロック出土石器観察表

No.	石 材	器 種	法 量 (mm)			重量(g)	備 考
			最大長	最大幅	最大厚		
1	頁 岩	剥 片	51.2	25.8	13.3	13.2	R剥片か？



第15図 上層構造配図 (1:1,000)

### III 繩文時代

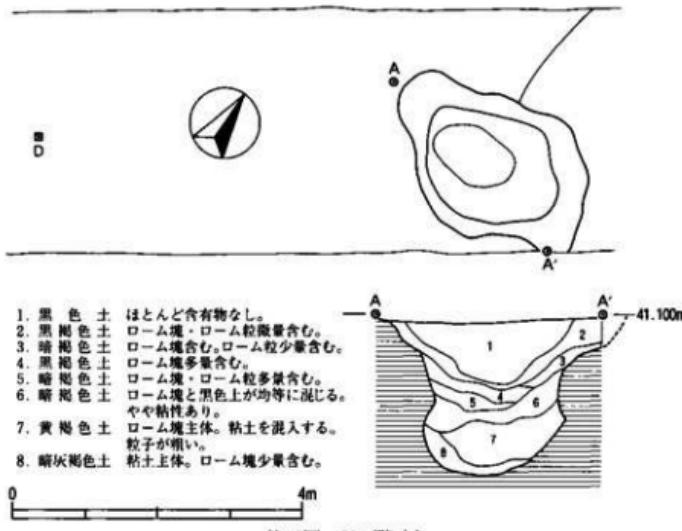
#### 1. 繩文時代の概要

平成2年度に実施した確認調査では、遺構は検出されず、遺物についてもまったく出土しなかった。このため、平成3年度当初には縄文時代の遺構・遺物は存在しないものと考えて調査を開始したのであるが、本調査中に土坑として調査した遺構のうち2基が縄文時代早期に一般的にみられる陥穴であることが判明したため、ここに項を設けることとする。なお遺物としては、石錐を陥穴中から2点・遺構外から1点の計3点検出したが、縄文土器については調査期間中をとおして1点も出土しなかった。

#### 2. 陥 穴

##### ① 001 (第16図～17図・図版4)

拡張部に設定したC杭とD杭のほぼ中间付近で検出した陥穴で、東側で弥生時代の竪穴住居跡(003)と重複している。平面形は長径3.2m、短径2.0mの不整規円形を呈しており、陥穴の一般的な形態と比較するとかなり円形に近い形態を示す。遺構下半はやや袋状に掘り込まれており、掘削深度は約2.1m、底面付近では武藏野ローム層を掘り込んでいる。陥穴では底面直上に粘性の強い黒色土が薄く堆積しているのが一般的である。セクション図には表われていないものの、当遺跡でも底部に貼り付くように同様の黒色土を確認することができた。なお、



遺構の東端はわずかに調査範囲外へ突出しており調査できなかった。

陥穴はその性格上あまり遺物を包含していないことがわかつたが、当跡では第17図に示した石錐2点を出土したのみで、土器類にいたっては全く検出されなかつた。1は黒曜石製の石錐で、かなり細かい剥離の多数施された精緻なものである。2は乳灰色を呈するチャート製の石錐で、裏面の中央には剥片断階の剥離面が残つてゐる。どちらも覆土中のかなり上層部分から出土した。



第17図 001出土遺物

第9表 001出土石器観察表

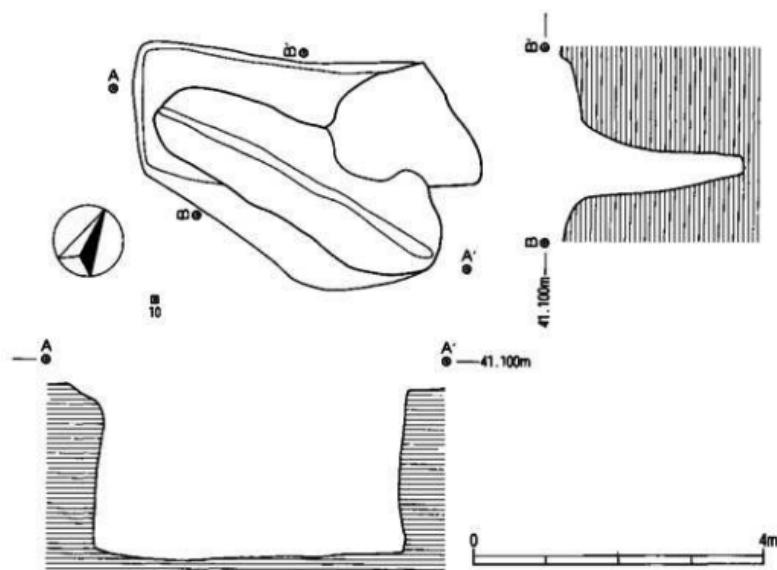
No.	石 材	器 種	法 量 (mm)			重 量 (g)	備 考
			最大長	最大幅	最大厚		
1	黒 曜 石	石 錐	28.1	(19.5)	4.1	1.6	
2	チャート	石 錐	18.5	17.1	4.0	1.0	

## ② 002 (第18図・図版4)

現遺部10杭の北側に隣接して検出した。遺構の周囲には自然の浅い落ち込みが複雑に展開しており、検出時には平面形が不明瞭で、その時期や性格についてはまったく推定することができなかつた。

陥穴であることを確認した面での平面形は長径4.3m、短径1.3mの長楕円形を呈し、底面は長径4.2m、短径0.2mの細長い楕円形で、垂直に近いかなり急な角度で掘り込まれている。横断面からみてTピットとよばれる陥穴である。掘削深度は2.5mと非常に深く、武藏野ローム層を0.5m以上掘り込んでいる。Tピットに一般的にみられる壁最上部の緩斜面は、周囲の落ち込みによって破壊されたものと思われる。縦断面両端はほとんど垂直で、わずかに袋状に掘り込まれている。

先述のとおり時期・性格とも不明のまま調査したため、残念ながらここに図示可能なセクションを実測できなかつた。調査時の所見では、土層の堆積は001と同様に自然埋没を示唆する様相を呈しており、底面直上では粘性の強い黒色土の堆積が確認できた。なお、遺物は全く含まれていなかつた。



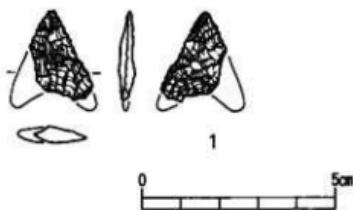
第18図 002(陥穴)

### 3. 遺構外出土の遺物 (第19図・図版23)

弥生時代後期の竪穴住居跡である006の覆土中から、石鎌が1点出土した。明らかに縄文時代の遺物であるので、本章において紹介することとした。

石材には夾杂物をほとんど含まない良質の黒曜石を使用しており、微細な剥離がかなり密に施されたために刃部は鋸歯状を呈している。

001出土の黒曜石製石鎌も同様の石材が使用されているが、いずれも先土器時代に使用された黒曜石とはまったく異質なものである。石鎌の石材となった黒曜石は長野県和田岬付近産出のものと思われ、先土器時代のものとは産地が異なることは明らかである。交易範囲の拡大がもたらした結果であろうか。



第19図 遺構外出土遺物

第10表 縄文時代遺構外出土石器観察表

No.	石 材	器 種	法 量 (mm)			重 量 (g)	備 考
			最大長	最大幅	最大厚		
1	黒 曜 石	石 鎌	22.8	(16.5)	3.9	1.0	弥生住居中出土

## IV 弥生時代

### 1. 弥生時代の概要

本遺跡の主体をなすのは弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡群である。調査区が細長く、そのなかでさらに拡張部・現道部と2回に分けて調査を行ったこともあり住居跡の調査の状況は非常によくない。2回の調査の際の調査区の空白・地下埋設物による攪乱等もあり、遺存状態の悪い状況での住居跡の調査となり、遺構・遺物の遺存が悪かったため、時期の決定できる資料のない遺構が多い。したがって、遺構の時期については出土資料を主体に遺構の形態も材料として判断を行っている。微妙な時期の決定はするべきでないかもしれないが、ここでは編集の都合上一応弥生時代・古墳時代と区分して取り扱うこととする。

### 2. 竪穴住居跡

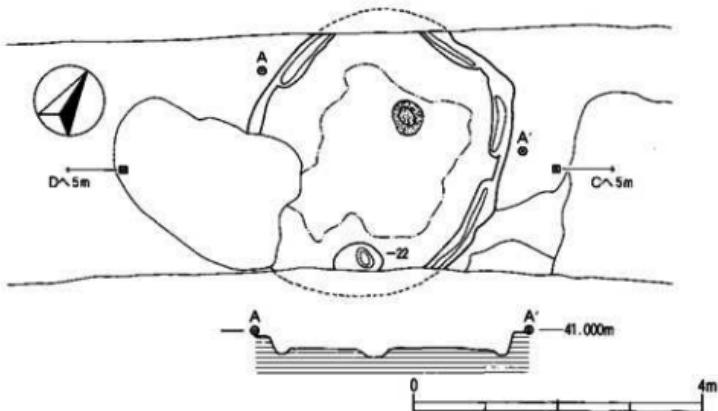
#### ① 003 (第20図～21図・図版5・24)

拡張部のC杭とD杭のほぼ中間に位置する竪穴住居跡である。西側の一部分は001と重複するが、その001を切って掘り込まれている。東側約1mには013が位置している。南北両端は、調査範囲外となり完掘できなかった。そのため、正確な規模は確定できないが推定長径4.2m、短径3.6mとみてよからう。形態は小判形で、確認面からの掘り込みは深さ0.25mを測り、今回の調査のなかでは、比較的掘り込みの深い遺構である。壁溝は、全周せず部分的に途切れ途切れに遺存し、幅0.2m、深さ0.05mを測る。床面の中央やや北寄りに、炉が1基存在し直径0.45m、深さ0.15mを測る。炉床は、よく焼けて硬化していた。床面の中心部は硬く踏み固められており、南側には二段に掘り込まれた長径約0.7mのピットが1基検出されており、柱穴とみられる。柱穴とみられるピットは以上の1基しか検出されなかった。

出土遺物は、小片が多く原形をうかがえるものは非常に少ない。そのためかなり小片にわたってもここに図版として掲載してある。すべて覆土中からの小片で原形がうかがえたのは1点に過ぎない。1～3、12～14は口縁部の破片である。1～3は壺の口唇部の破片で、複合口縁の外面に細かい縄文の地文に縦の突帯が貼り付けられている。4～11、15～19は壺の破片であろう。細かい羽状縄文の地文を、沈線の山形文の組み合わせで鋸歯状に区画し、区画した外区の縄文をミガキで消している。弥生時代後期の典型的な施文方法である。20は唯一原形の復元できた椀であるが、古墳時代のものとみられ流れ込みによるものとみられる。

#### ② 004 (第22図～24図・図版6)

拡張部のF杭のそばで検出された竪穴住居跡である。北半分側は調査区外となり、約半分しか調査ができなかったため、全体の形状は確定できなかった。003とは同じような形態に



第20図 003(住居跡)

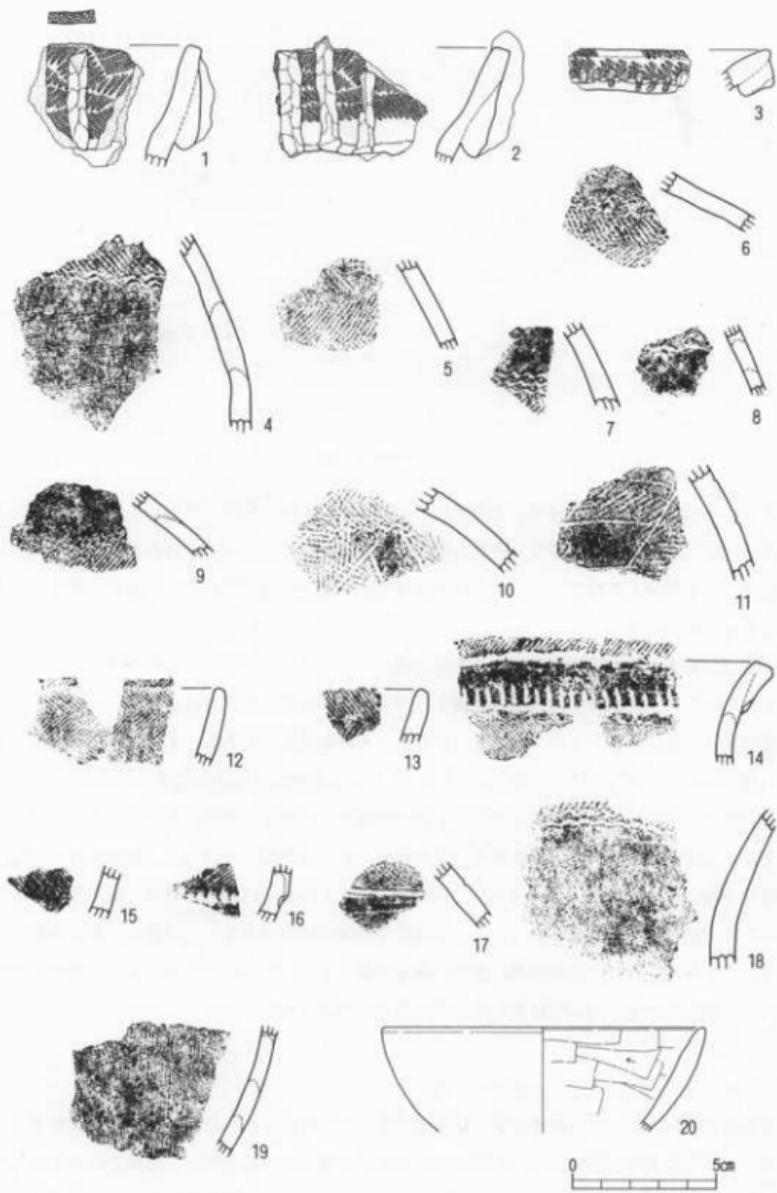
なると思われ、長径約4m前後、短径約3.5m前後的小判形になると思われる。確認面からの掘り込みは0.26mで、壁溝はなく南側の壁際になだらかな掘り込みの直径約0.4m、深さ0.3mのピットが1基検出されている。これはやはり003と同様の壁際にみられるピットで、柱穴となるものであろう。

床面は、あまり踏み固められておらず特に硬化した面としてはとらえられなかった。炉は検出されていないが、調査区外の遺構北側半分の部分に炉が存在する可能性が高い。

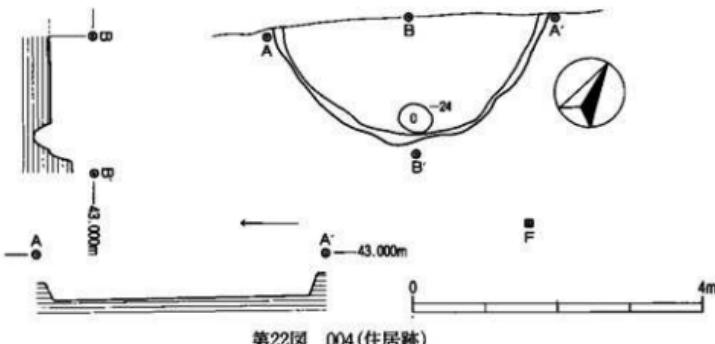
遺物量は少なく、形をうかがえるものは3点、その他は小片である。1は壺の口唇部で、復元口径21.6cm、内面に赤彩の痕跡が認められる。外面は斜縄文の施文がほとんど摩耗している。2は高壺の壺部で復元口径21.6cm、口唇上面に斜縄文、外面は羽状縄文と2条のS字状結節縄文による区画によって下部はミガキが施されている。3は椀の口縁部で、復元口径15.2cm、斜縄文の施文帯のほぼ中央に内面から1か所穿孔されている。口唇部と外面下部のミガキの施された部分に赤彩がなされている。4以下は小片で壺の破片である。4は複合口縁に突帯を貼り付けたもの、5~11は壺の体部に細かい縄文の施文されたもので、2条のS字状結節縄文によって区画された横帯内に綾杉状に施文されたものがほとんどである。

### ③ 005 (第25図~27図・図版6・24)

拡張部のG杭のそばに位置する竪穴住居跡である。西側にはやや離れて004が位置する。004と同様に遺構の南側一部しか調査ができず、北側の半分以上の部分は調査区外となっている。調査した範囲からみるとやや隅丸方形の小判形になるものとみられる。調査区内での最大径4.2mである。壁溝は存在せず、南端の壁際とやや内側に入った部分とにピットが1基ず



第21図 003出土遺物



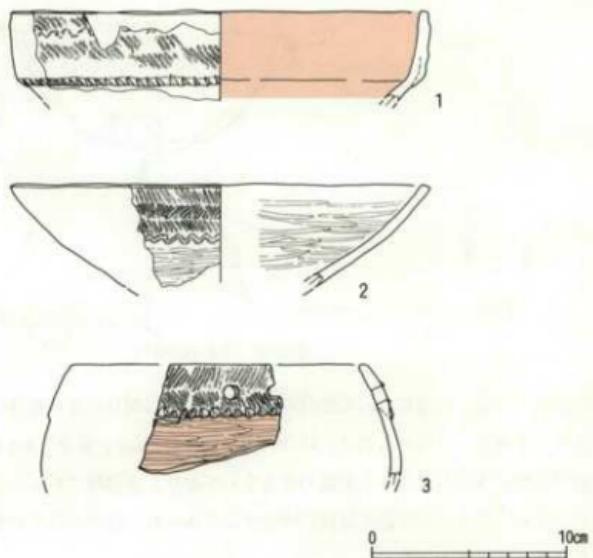
第22図 004(住居跡)

つ検出されている。内側に入った部分のものは、二段に掘り込まれ長径0.65m、短径0.52m、深さ0.37mを測る。壁際のものは、ほぼ円形で直径約0.5m、深さ0.3mを測る。どちらのピットも他の遺構にみられるような配置の仕方をしており、本遺跡でのピットの掘り方の特徴的なものといえるだろう。炉は調査区外に所在するとみられ、検出されていない。床面の踏み固めはあまりされていなかった。

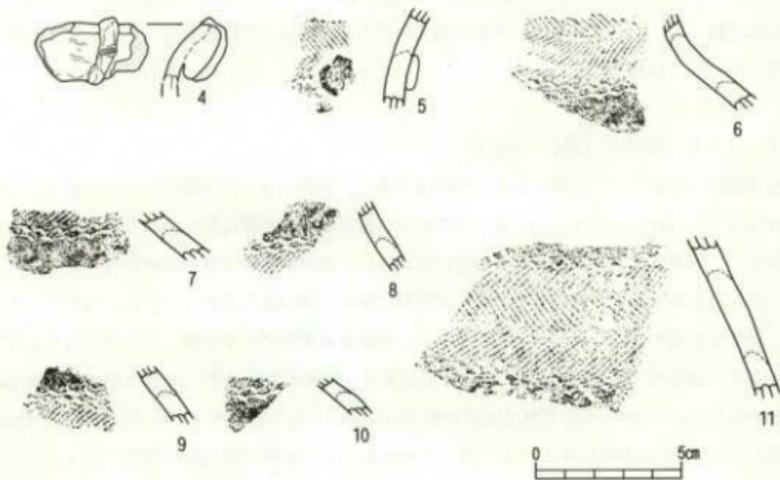
遺物量は少なく、形態をうかがい知ることができたのは2点で、それ以外は小片ばかりであった。1は南側壁際のピット内出土の壺の底部である。底径7.8cm、ナデとミガキによって調整されている。ピットに廃棄されたものであろうか。2は小片であるがからうじて原形が復元されたもので、復元口径8.4cmの小形の高杯の坏部である。3以下は羽状繩文を施した文様帶の区画に沈線、もしくは2条のS字状結節繩文のどちらかによって区画されている。いずれも壺の破片で、5は口縁部である。

#### ④ 006 (第28図～29図・図版7)

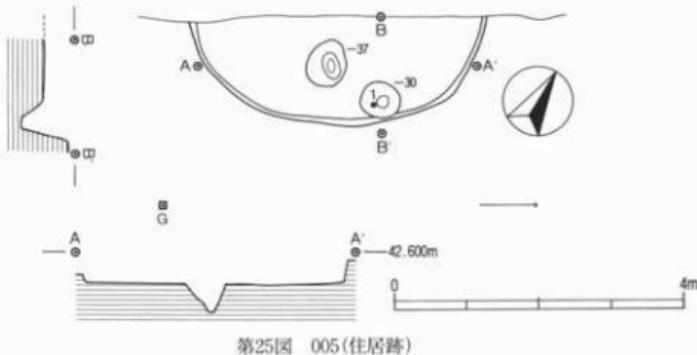
拡張部のJ杭のそばに位置する竪穴住居跡である。北側に007が隣接し位置関係からは同時存在は考えられない状況といえる。確認面での遺存状況が非常に悪く、掘り込みがほとんど遺存せず、形態についても確実なものとはいえない。南端は調査区外のため全容は調査できなかつた。形態をみると東側はややゆがんだ形態であり、壁の立ち上がりもほとんどないことから、現在より壁が外側へ広がり遺構の形態が、現状より東側が広がる整った小判形となる可能性がある。調査時の長径は4.3m、短径3mを測る。壁溝は存在せず、床面の中央部は硬く踏み固められていた。踏み固められた床面の北側端に炉が1基検出され、長径0.56m、短径0.45m、深さ0.1mを測る。炉床はあまりよく焼けていなかった。炉の北側と南の壁際にピットが1基ずつ検出されており、北のものはほぼ円形で直径0.5m、深さ0.17m、南のものもほぼ円形で直径0.4m、深さ0.17mを測る。



第23図 004出土遺物(1)



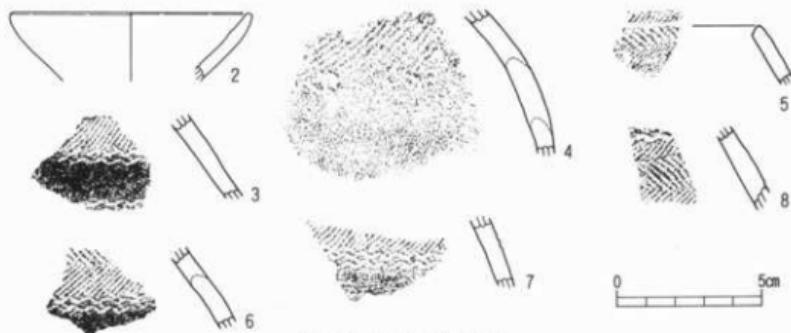
第24図 004出土遺物(2)



第25図 005(住居跡)



第26図 005出土遺物(1)

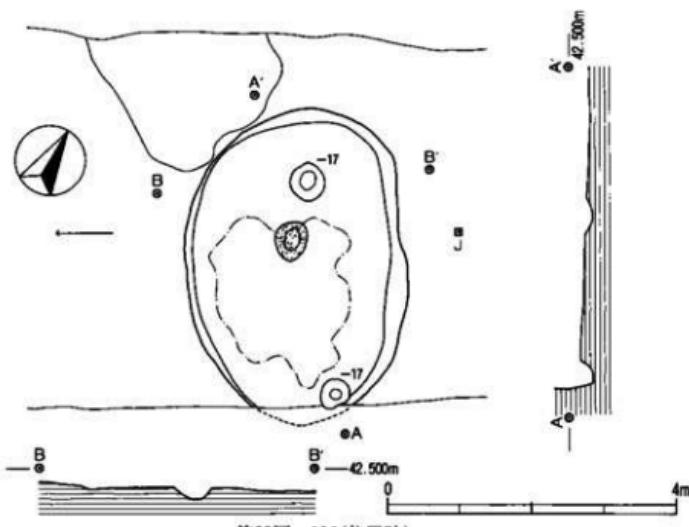


第27図 005出土遺物(2)

遺物は図示した壺の口唇部の小片が出土したのみで、ほかに図示できるような遺物は出土していない。

##### ⑤ 007 (第30図・図版7)

拡張部のJ杭のそばに位置する竪穴住居跡である。南側に006が位置している。本遺構はきわめて遺存が悪く、踏み固められた床面を検出したのみで、遺構の全体は把握できなかった。



第28図 006(住居跡)



第29図 006出土遺物

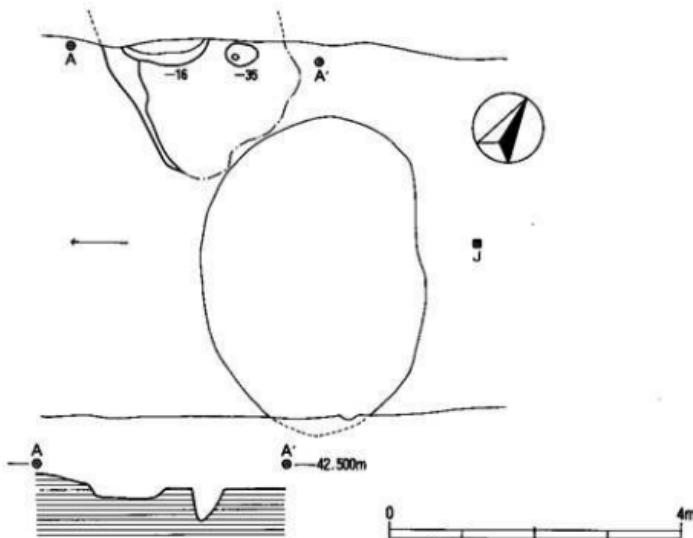
また遺構の北側は調査区外となり調査できなかった。床面の検出状況では、006の覆土の上に床面が形成されていた可能性も考えられ、逆に006の掘り込みによって破壊されていることも考えられる。調査時に検出された遺構の範囲は、南北2m、東西2.6mで、西側では壁の掘り込みが遺存していたことから、西側の部分は遺構の旧状をとどめているとみてよかろう。

床面の北端、調査区との境界付近にピットが2基検出されている。1基は長径0.45m、短径0.25m、深さ0.35mを測る小規模なもので、その西側には一部調査区外のため調査できなかつたが、調査時の径1.2m、深さ0.16mの大形で浅い皿状のピットが検出された。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

#### ⑥ 008 (第31図~32図・図版7・24)

拡張部のL杭とM杭の間に位置する竪穴住居跡である。すぐ東側には溝の020が位置する。遺構の北側は調査区外のため約3分の1は未調査となっている。また、南側の一部は東京電力の電柱の支線が埋設されていて調査ができなかつた。調査時の南北長3.9m、東西長4.6mを測り東側では壁の掘り込みは遺存しているが、西へ向かって確認面がゆるく傾斜しているため、壁は遺存せず、床面が検出されたのみである。当初の形態は隅丸方形に近い小判形になるもの



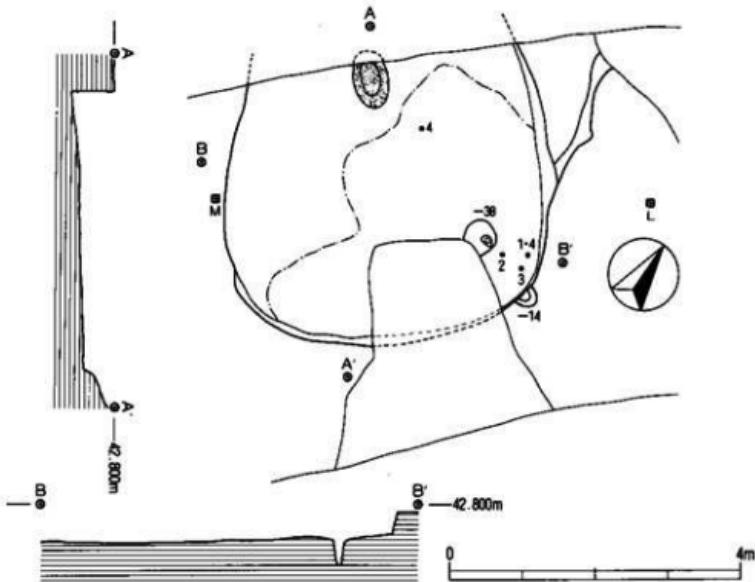
第30図 007(住居跡)

とみられ、西側の遺構の範囲はもう少し西側へ広がる可能性が高い。床面は壁の掘り込みの遺存する東側寄りに、踏み固められた床面が検出され、踏み固められた範囲の少し外側の、住居跡の中央やや北側寄りに炉が1基検出されている。炉の北端は調査区外になるため調査できなかつたが、長径約0.8m、短径0.5mになるとみられ、深さは非常に浅く0.05m前後である。炉床はやや焼けて硬化していた。

遺構の床面南東寄りにピットが1基検出されている。ピットは二段に掘り込まれ、直径0.4m程を浅く0.1mほど掘り下げ、その中を長径0.2m、短径0.15m、深さ0.38mに小さく掘り込んでいる。これは柱穴とみられるが柱は非常に細いものとなろう。そのほかには、柱穴等の掘り込みは検出されなかった。

遺物は、本遺跡としては大形のものがまとめて出土している。遺物の出土地点は竪穴住居跡の東南隅のピットと壁の間にかたまって出土しており、1、2、3はそこから出土している。また4は遺物集中地点と炉の東南約1m離れた地点との2か所からの出土のものが接合している。床面に密着した状態で出土してはいるが、以上のような出土状況と、1から5の遺物すべてが火熱を受けていることから、竪穴住居廃絶後に廃棄された遺物であろうとみられる。

1は壺の上半部である。復元口径は14.6cmで、口唇部に折り返しがみられ外面下部にキザミが施されている。器面の調整はミガキが施されている。2は壺の胴上部である。復元最大径

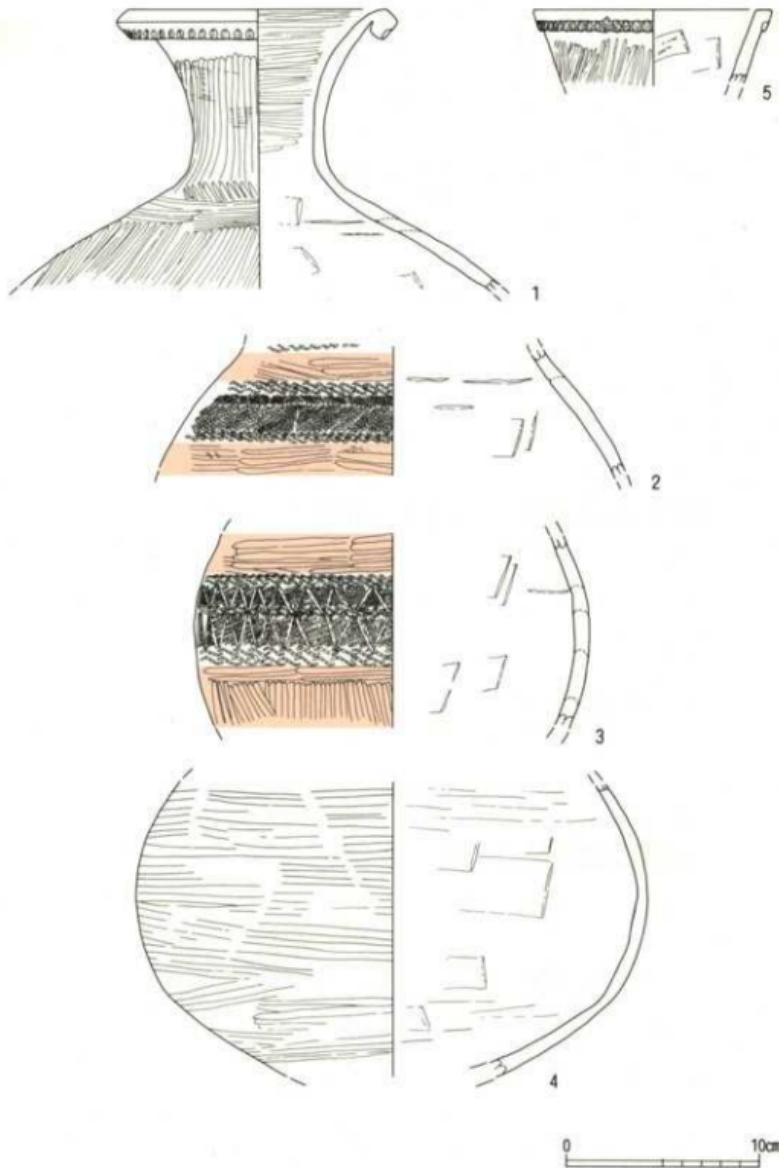


第31図 008(住居跡)

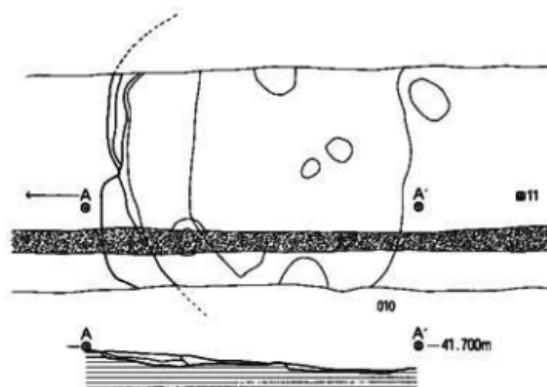
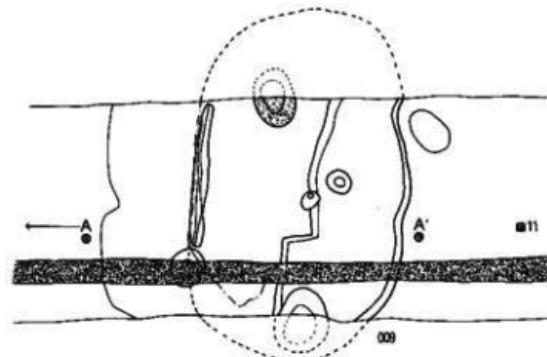
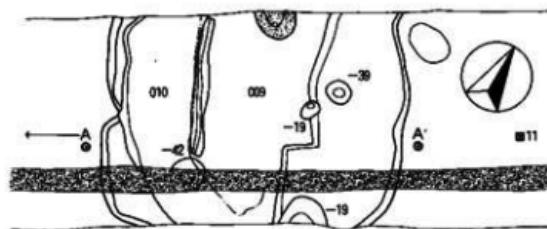
24.0cmで、2条のS字状結節繩文によって区画された文様帯を有し、細かい羽状繩文が施されている。上部にも文様の区画となるS字状結節繩文が一部みえている。無文帯の部分はミガキが施され淡い赤彩が認められる。3は壺の胴部で復元最大径20.4cm、2条のS字状結節繩文によって文様帯を区画している。最大径の胴部を中心に斜繩文による地文を2区にわたって施し、その上から沈線による山形文が施されている。それらの上下に位置する無文帯は、ミガキによって調整され赤彩が認められる。4は壺の胴部である。最大径26.5cmで、外面の調整はミガキによってなされている。火熱を受け内面の器壁が剥落している。5は壺の口頭部で復元口径12.4cmを測る。口唇部が外面に小さく折り返され、キザミが施されている。以上大形の破片5点のほかは図示できるような遺物は出土しなかった。

#### ⑦ 009 (第33図・図版8)

現遺部の11杭と12杭の間に位置する竪穴住居跡である。本遺構は次に述べる010の竪穴住居跡と、028の土坑と重複しており、いずれも南北両側の調査不可能な部分にかかっているため、3遺構とともにその当初の形態は明確でない。調査時の土層観察と、床の構築状態から009と010との新旧関係は把握することができた。010の方が古く、009がその後に新たに構築されている。009は南側は調査区外のため、北側は日本電信電話会社（NTT）の



第32図 008出土遺物



第33図 009・010(住居跡)

地中埋設ケーブルが所在するために調査ができなかった。遺構の西側は踏み固められた張り床が検出され、その床面に壁溝が検出されたので遺構の境界と考えてよいだろうが、東側については踏み固められた張り床が途中で削平されて遺存せず、調査時に確認できたのは張り床構築以前の掘り方であるので、床の範囲は調査で検出した範囲よりも外側まで広がり、形態も現状より東西に長くなるものとみられる。調査時の南北長2.9m、東西長3mを測るが、本来の長径は4.8m、短径3mほどの長小判形の形態を示すものとみられる。壁溝は西側で検出されており遺構を全周していたものと思われる。床面についても、踏み固められた張り床が全面に構築されていたものとみられる。床面の遺存している部分の北側で、調査区との境界付近に炉が検出されている。ほぼ半分は調査区外となるため全容は不明であるが、遺存長0.6m、深さ0.05mを測る。炉床はよく焼けて硬化していた。炉の位置がやや西側に寄りすぎているようでもあるが、炉としては確実なものである。推定復元される平面形のほぼ中央に、小さなピットが2基検出されている。どちらも直径0.3mほどの大きさで深さは西側のものは0.19m、東側のものは0.39mを測る。さらに南側の調査区外に一部かかっているが、大きめのピットが1基検出されている。調査区内の長径0.7m、深さ0.19mを測り、貯蔵穴位の大きさのピットである。

遺物は、図示できるような遺物は出土しなかった。

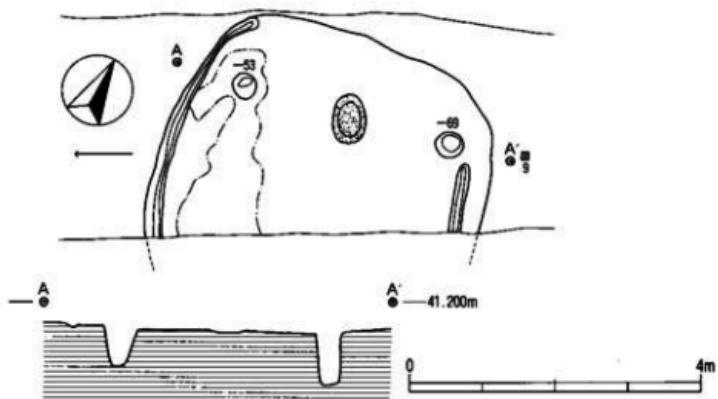
#### ⑧ 010（第33図・図版8）

前に述べた009竪穴住居跡と重複する竪穴住居跡である。028土坑とも重複するが確認面が傾斜していたため、覆土の状態がよい段階では観察できなかったが、009の床の構築状況から新旧関係をつかむことができた。009よりも010の方が古く構築されているが、032土坑との新旧関係はつかめなかった。本遺構は西側で壁の掘り込みが認められたが、それ以外は把握できなかったので形態は明確ではない。隅丸方形か円に近い小判形になるかもしれない。北側はNTTのケーブル埋設により、南側は調査区外のため調査ができず、東側は深く削平されているために床面が遺存せず、本遺構の範囲は確定できなかった。床面についても009のように、踏み固められた張り床は確認できず、西側の壁から009の壁までの約0.9mの間だけが確認できたのみである。壁の掘り込みも北側で一部段差があり、形状に乱れがある。調査区のやや南側にピットが1基検出されているが、ちょうど旧町営水道管の埋設によって攪乱されており、ほぼ中央が欠け南北両端が検出できただけである。直径約0.5m、深さは0.42mである。床面にはこれ以外の掘り込み等はみられなかった。

遺物は009と同様に図示できるものは出土しなかった。

#### ⑨ 011（第34図・図版9）

現道部の9杭の西側に位置する竪穴住居跡である。南側は調査区外となるため調査できず、



第34図 011(住居跡)

形態からみて造構のほぼ半分の調査にとどまった。造構の遺存は非常に悪く、壁の掘り込みがまったく遺存せず、確認面で床面と壁溝が検出されただけである。西側の境界とみられる部分に壁溝状の溝がめぐることから、そこを壁の位置として形態を認定し、東側も同様に壁溝状の溝のめぐる部分を壁の位置とした。北側は壁溝の曲がり方と、張り床下の掘り方の痕跡から造構の範囲を認定している。本来床面は、全面に踏み固められた張り床が構築されていたものとみられるが、調査時には造構の西側に一部だけ踏み固められた張り床が遺存しそれ以外は掘り方が遺存しているのみであった。造構の中央やや北側に炉が検出され、長径0.65m、短径0.45m、深さ約0.05mで炉床はよく焼けて硬化していた。炉の東西両側の壁寄りにはピットが1基ずつ検出され、ともに柱穴とみられる。深さは西のものは0.53m、東側のものは0.69mと比較的深く、本遺跡では珍しく柱穴が通常みられる位置に検出されている。南側の調査区外にも柱穴が2基存在するものとみられる。

遺物は図示できるようなものは出土していない。

## V 古墳時代

### 1. 古墳時代の概要

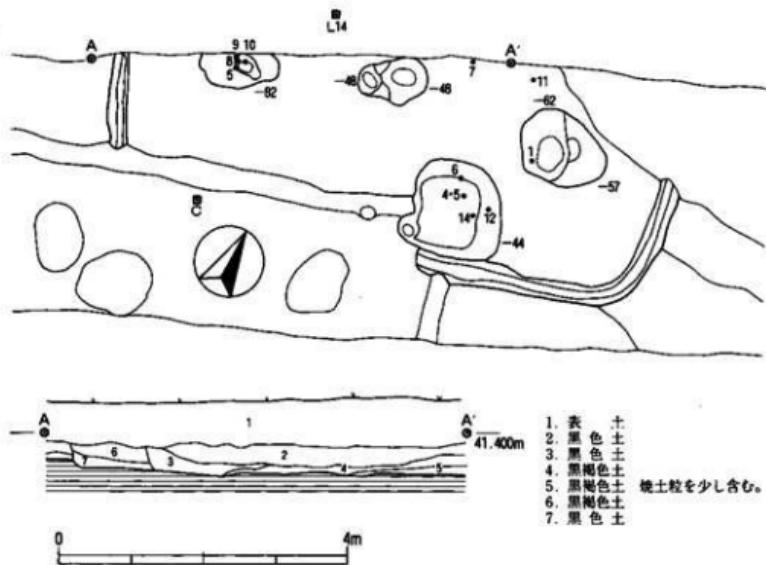
本遺跡の主体をなすのは弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡群であることは、先にも「IV 1. 弥生時代の概要」で述べた。また同様に、時期決定についての未確定要素についても触れている。つまり、出土遺物を主体としてそれ以外に形態を参考にして便宜上、時期区分してここに古墳時代としてとりあげて説明していくことにする。

古墳時代の竪穴住居跡としてここにとりあげたのは、掘り込みも形態も明確な2軒と非常に遺存の悪い2軒の計4軒である。これらのうち明確な2軒は、形態的には隅丸方形で古墳時代中期の様相を示している。遺存の悪い2軒は隅丸方形と、楕円形とみられるが時期については不明確である。先に弥生時代でとりあげた竪穴住居跡のなかに、古墳時代前期によくみられる楕円形のものがいくつかあることから、古墳時代のものが含まれている可能性が高い。いずれにしても本集落周辺遺跡の状況からも、弥生時代後期から古墳時代中期までの遺構が多く、それ以降の遺構はほとんど検出されていないことからも、本遺跡の時期も同時期におさまるものとみられる。

### 2. 竪穴住居跡

#### ① 012 (第35図～37図・図版9・10・26)

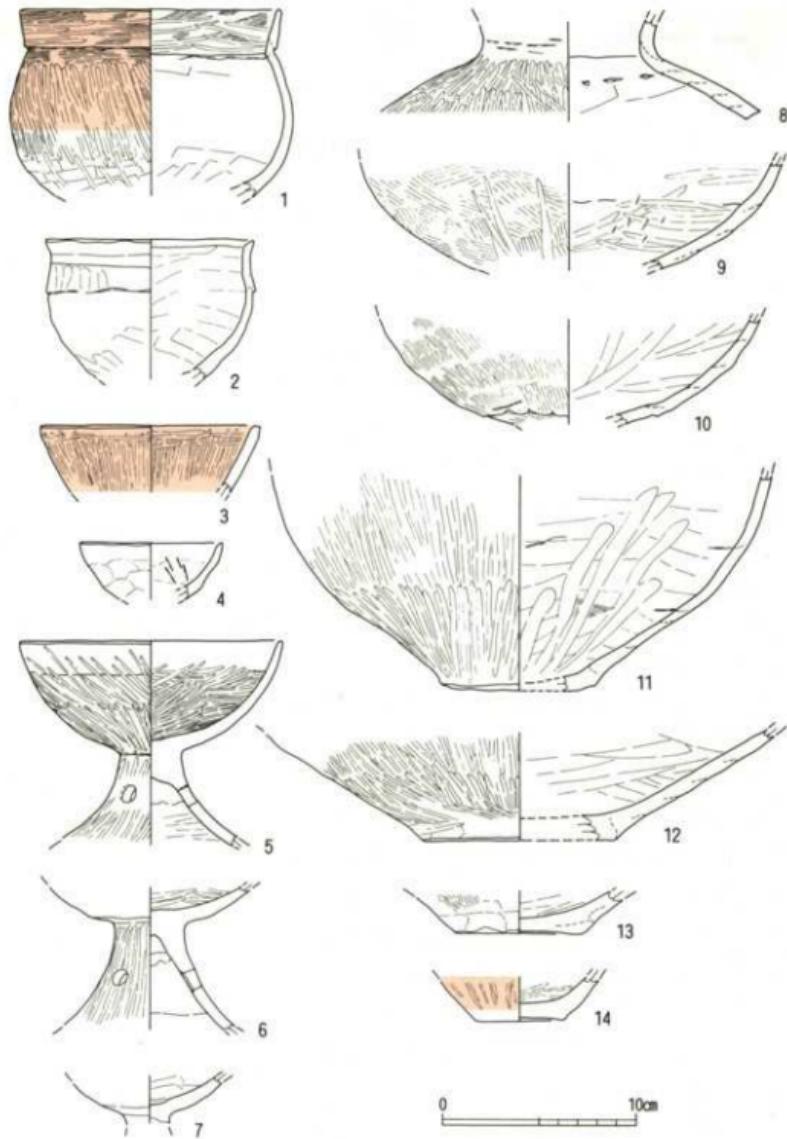
拡張区のL14、C杭のそばに位置する竪穴住居跡である。北側は、調査区外のため調査できなかったが、南辺と東辺・西辺は調査区中で一部または全部が検出できたので、遺構の大まかな形態は推定できる。南辺の大半と南西の隅は013と重複しており遺存していない。遺構検出時には遺構の形態が把握できなかったため、覆土の観察をすることができず、本遺構と013との新旧関係はつかめなかった。遺構の規模は東西長約8m、南北長は調査区外となり不明であるが、東西長とほぼ同様であると考えられ、東南の隅が検出されているのでそれをもとに形態を復元すると、隅丸方形の大形ピットが検出されている。大きさは1.4m×1.2m、深さ0.44mで貯蔵穴の機能が考えられる。柱穴とみられるピットは3基検出されている。そのうち2基は遺構の平面でみるとほぼ対角線上に位置し東側のものは1.3m×1m、深さ0.62mで、柱は東側からの抜き取り痕が認められた。西側のものは一部が調査区外になって調査できなかったが、径1.2m、深さ0.82mで、東側のものとは形態がやや異なり抜き取り痕は確認できなかった。そして東西の柱穴の中間に、さらにもう1基柱穴が認められた。長径1m、短径0.6m、深さ0.48mで、本来の柱穴の間に補助の柱が建てられていたのであろう。床面はやや



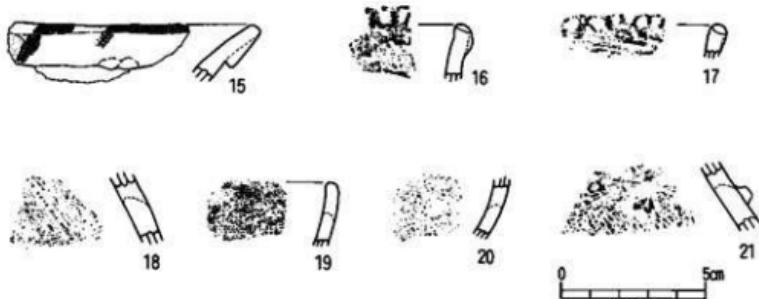
第35図 012(住居跡)

踏み固められていたが、さほど固くはなっていなかった。炉はおそらく調査区外となり遺構の中央北側寄りに存在するものと思われる。

遺物は、本遺跡のなかでは大形のものが多く出土している。そのなかでは4、5、6、12、14は貯藏穴内から出土し、1は東側柱穴、5、8、9、10は西側柱穴周辺から出土している。1は碗で復元口径13.4cmを測る。口縁部外面はハケメの後ミガキがなされ、胴部はミガキ、底部は削りがなされる。口唇部から胴下部までの外面は赤彩が施されている。2も碗で復元口径10.8cm、ナデによる調整がなされる。3は高坏の坏部であろうか、復元口径11.3cmミガキによる調整に内外面ともに赤彩が施されている。4は小形の高坏か器台の一部であろう。復元口径は7.2cm、ナデによる調整がなされている。5は高坏で、坏部の口径13.4cmを測る。ミガキとナデによる調整がなされている。6は高坏の一部で、ミガキとナデによる調整がなされている。7も高坏の一部で、やや遺存が悪いためナデによる調整が一部で観察されたにすぎない。8は壺の頸部で外面はミガキによる調整がなされている。9は壺の下部で、外面はハケメ後ナデ、内面はナデによる調整によって調整されている。10も壺の下部で、ハケメで調整された外面の一部にすすが付着し、内面はナデがなされている。11は壺の底部で復元底径8.2cm、外面はミガキ、内面はナデによる調整で一部にハケメが認められる。12も壺の底部で復元底径9.8cm、外面はミガキ、内面はナデによる調整がなされている。13も壺の底部であろう。復元底径6.6cm、外面



第36図 012出土遺物(1)

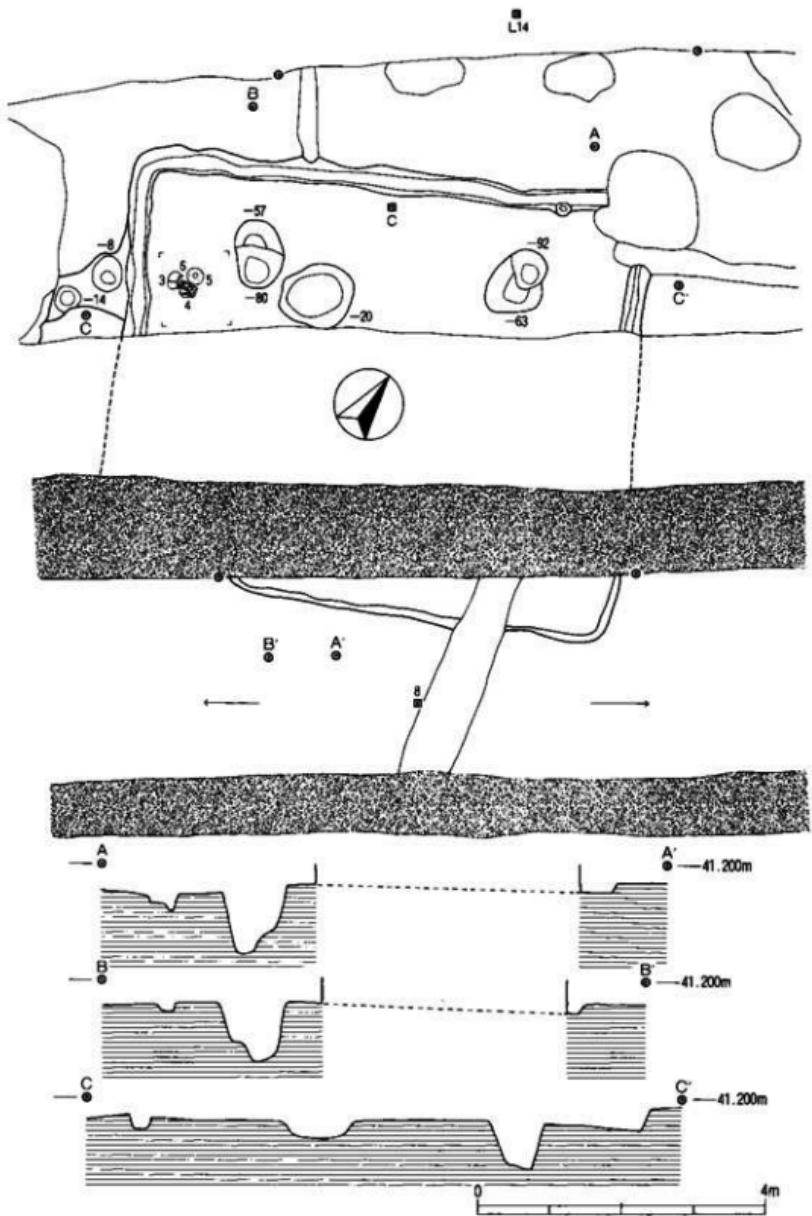


第37図 012出土遺物(2)

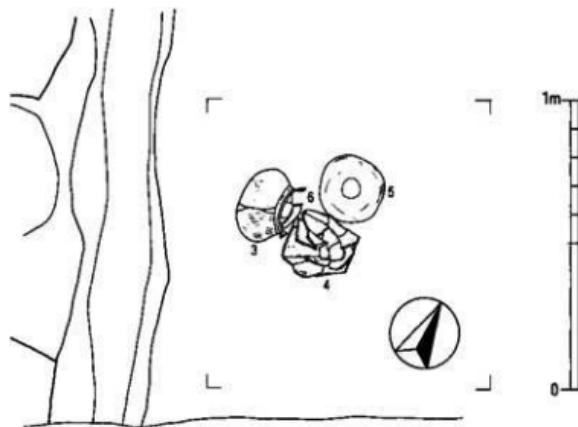
はハケメ後ナデ、内面はナデがされている。火熱を受けている。14も壺の底部とみられるが外面には赤彩が施される点が他の底部と異なる。内外面ともにミガキによる調整が施されている。15以下は小片で覆土中からの出土である。

(2) 013 (第38図~41図・図版9・10・11・25)

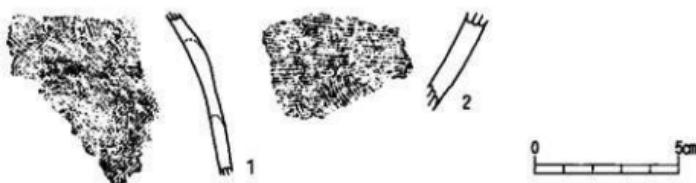
拡張区のC杭と、現道部の8杭の近くに位置する竪穴住居跡である。今回の調査では拡張部と現道部との両側にまたがって検出・調査され、全容がほぼうかがえる唯一の竪穴住居跡である。拡張部と現道部との間は掘り残しにより未調査となり、さらにNTTの埋設ケーブルによる未調査区が存在するために遺構のつながりとしてはうまく把握できなかった。拡張部で北辺、東辺の一部、西辺の一部が検出され、現道部で南辺、東辺の一部が検出されているので、全体の形態は推定復元することができる。東西長7.3m、南北長6.2mの東西に長い隅丸長方形となる。拡張部では壁溝が調査部分を全周したが、現道部では遺構の遺存が悪く、掘り込みが非常に浅く壁溝は確認できなかったが、本来は壁溝が全周していたものと考えられる。拡張部の床面はやや踏み固められ硬化していたが、現道部の床面は硬化した面はほとんど遺存せず、遺構の遺存状態の違いとはいえ、同一の遺構の床面とは考えられないほどであった。拡張部の床面には柱穴が2基検出され、そのどちらもが抜き取り痕を有する状態であった。西側のものは長軸1m、短軸0.7m、深さ0.8mを測り、北側から掘り込んで柱の抜き取りを行ったような状況である。東側のものは長軸1m、短軸0.7m、深さ0.92mで、南側から掘り込んで柱を抜き取ったような状況を示している。西側の柱穴のすぐ内側にはほぼ円形のピットが1基存在し、径1.2m、深さ0.2mを測る浅い皿状である。このピットは、焼けておらず焼土の堆積もなかったので炉とは考えられないが、通常は竪穴住居跡の炉の位置にあたる。炉は調査範囲内では検出されておらず、通常とはやや異なった位置に存在するものと考えられる。



第38図 013(住居跡)



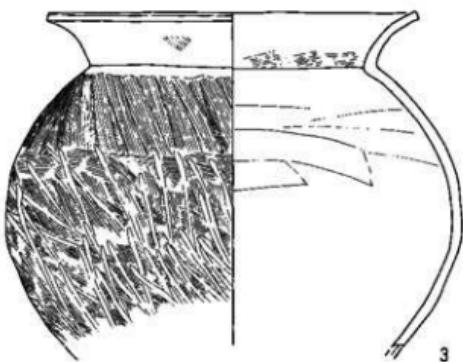
第39図 013遺物出土詳細図



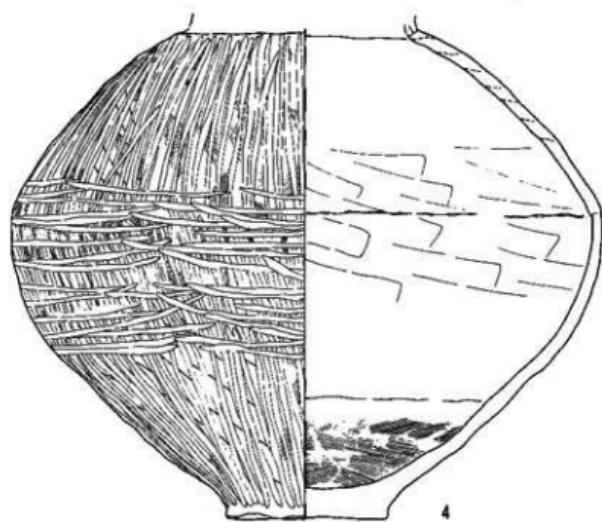
第40図 013出土遺物(1)

南側の現道部は030に切られているが、遺存状態が悪く030の東側はよく踏み固められた張り床が遺存していたが、西側は張り床が遺存せず掘り方しか検出できなかった。

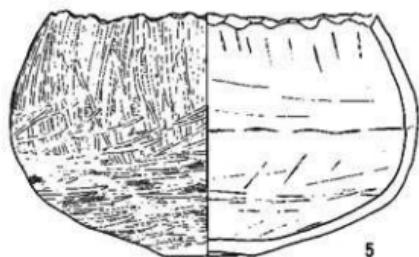
遺物は西側柱穴の西、壁寄りに4個体分が床面上にまとまって出土している。大形の土器が3個体、三角形状に位置しそのなかに小形の壺が置かれていたとみられる。これらは遺構の廃棄時に不要となりそのまま廃棄されたものと考えられる。3は壺で復元口径19.2cmを測る。底部は検出されなかった。口縁部はナデによって調整され、外面の胴上部はハケメ、それ以下はハケメ後ミガキがされている。内面はナデによって調整されている。4は算盤玉に近い胴部形態を示す壺である。頸部は遺存していなかった。最大胴部径30.6cm、底径8.2cmを測り、外面はハケメ後にナデ、ミガキが施されている。内面は底部近くはハケメ、それ以外はナデによって調整されている。底部はケズリが認められる。5は鉢である。最大径21.2cm、復元器高12.4cmを測る。これは壺の胴部のやや頸部寄りを打ち欠いて切断し鉢として用いたもので、断面は荒れており使用等による摩耗は認められなかった。そのため断面がいわゆるギザギザとなっている。外面はハケメ後ナデ、ミガキが施され、内面はナデによって調整されている。6は3の壺



3



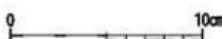
4



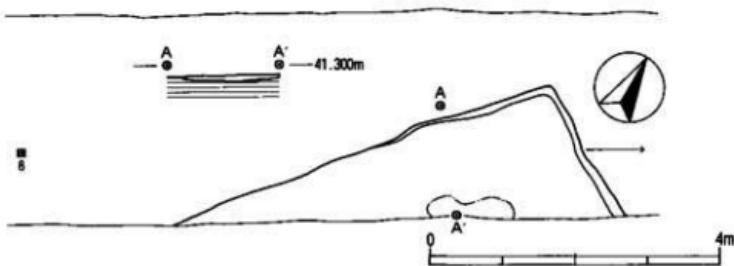
5



6



第41図 013出土遺物(2)



第42図 014(住居跡)

の内側に4、5に挟まれるように検出された壺である。完形で口径12.6cm、器高6.7cmを測る。外面は基本的にはハケメの後ナデ、ミガキが行われ、内面はナデ、ミガキが施されている。そのほかに1、2は覆土中から出土した小片で外面に細かいハケメが認められる。

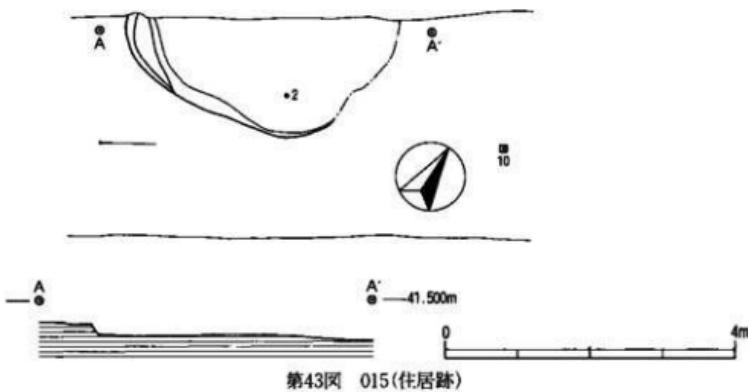
### ③ 014 (第42図・図版12)

現道部の8杭のそばに位置する竪穴住居跡である。遺構の南側は調査区外となるため調査できず、北側で遺構の北東の隅を中心とした部分を調査できたのにとどまっている。そのため形態・規模は確定できないが、調査できた部分からみると形態は隅丸方形を示すものとみられ、方形の辺はほぼ直線的である。調査できた部分の辺の最大長は5.6mで、調査範囲にはピット等が検出されていないことから、柱穴等は調査部分よりさらに遺構の内側に所在する可能性が高く、かなり大形の住居跡であった可能性が高い。しかし調査範囲でみると遺構の遺存状況が悪く、壁の掘り込みはほとんど遺存せずかろうじて掘り方の検出と、ごく一部での壁の立ち上がり、踏み固め床面の検出によって遺構の範囲を判断できたような状態であった。以上のような遺構の状況から床面には柱穴・炉等は検出されなかった。先に述べた012、013と同様な形態になるものとみられる。

遺物は図示できるような遺物は出土しなかった。

### ④ 015 (第43図～45図・図版12・26)

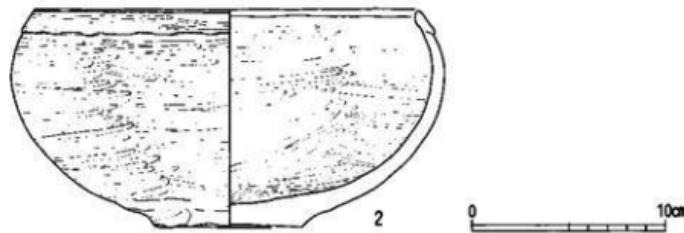
現道部の10杭のそばに位置する竪穴住居跡である。遺構の北側は、調査区北側の調査区外になるため調査できなかった。遺構の遺存状況も悪く、西側には壁が遺存していたが東側は遺存せず、床面が検出されている。西側の壁の掘り込みは2段に段差をもって掘り込まれている。床面には柱穴・炉等の掘り込みは何も検出されず、図示したのは踏み固められた床面の検出できた範囲である。そのため東側の遺構の範囲はより広くなる可能性が高い。西側の壁の2段の掘り込みについても本来2段に掘り込まれたものではなく遺存が悪かったために、遺構の精査



第43図 015(住居跡)



第44図 015出土遺物(1)



第45図 015出土遺物(2)

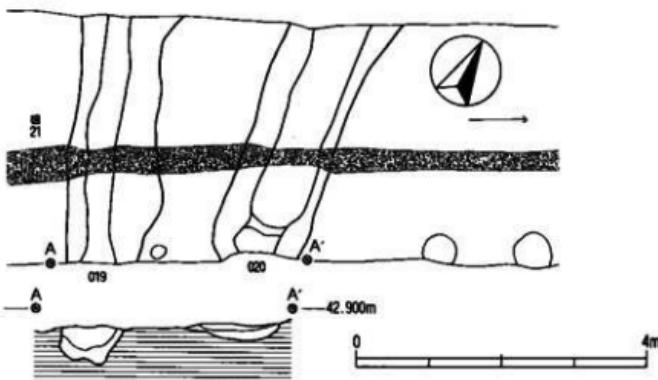
の際に振りすぎてしまったものとみられる。

遺物は2の鉢が検出されている。口径20.5cm、器高11.1cmを測り、外面はほぼ全面にミガキが、内面はミガキが施されている。口唇部は外面への小さな折り返しがされている。1は覆土中から出土した複合口縁の小片である。

### 3. 溝

#### ① 019 (第46図・図版13・14)

現道部の21杭のそばに位置する溝である。すぐ東隣には同様な溝020が位置する。南側は



第46図 019・020(溝)

調査区外のため調査ができず、一方北側の拡張部では調査範囲内には検出されなかった。北側の拡張部では本遺構周辺の他の遺構も遺存状況が悪く、本遺構の掘り込みが浅かった部分が位置し、耕作等によって表土化のために検出できなかったものと思われる。本来は北側の拡張部にも本遺構が連続して所在していたものと考えられよう。幅約1.2m、深さ約0.45mを測り、調査区内では長さ約3.4mの直線状に調査された。断面形状は逆台形状を示し、底面はほぼ平坦で、覆土は黒色の有機土を主体とし、自然堆積状況を示していた。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

## ② 020（第46図・図版13・14）

現遺部の21杭のそばに位置し、西隣に先に述べた019が存在する。調査区南側では019との間隔約1m、北側で1.5mを測る。019と同様に南側は調査区外のため調査できず、北側の拡張部では多分掘り込みの深さが浅いために表土化されたものとみられる。形態は020とは異なり、浅い皿状の断面を示し、覆土は黒色有機土を主体とした自然堆積状況を示している。調査区内ではほぼ直線状に南北方向にのび、幅約1.2m、深さ約0.2mを測る。調査区南端の部分で段をもって浅くなり幅も減じているので、調査区南側のすぐ外側で終結している可能性が高い。本遺構の時期は、周辺の状況から古墳時代前期から中期にかけてのものとみられる。

## VI 歴史時代以降

### 1. 概要

今回の調査で歴史時代以降としたのは形態等をほとんど確認できなかった竪穴住居跡3軒と時期不明の溝11条、土坑6基、ピット群である。これらは、時期を断定することができないものがほとんどであるが、古墳時代以前の可能性は周辺の環境等からみて非常に低い。これらのなかで溝の多くは、地境に間連するものがほとんどで、多分近世から現在まで続いている境界の溝であると考えられる。土坑は時期不明のものがほとんどである。ピット群は現道部のみで検出されたが、掘立柱建物跡を構成するものは確認できず、性格・時期ともに不明の小ピットを一まとめにしてここにとりあげる。

### 2. 竪穴住居跡

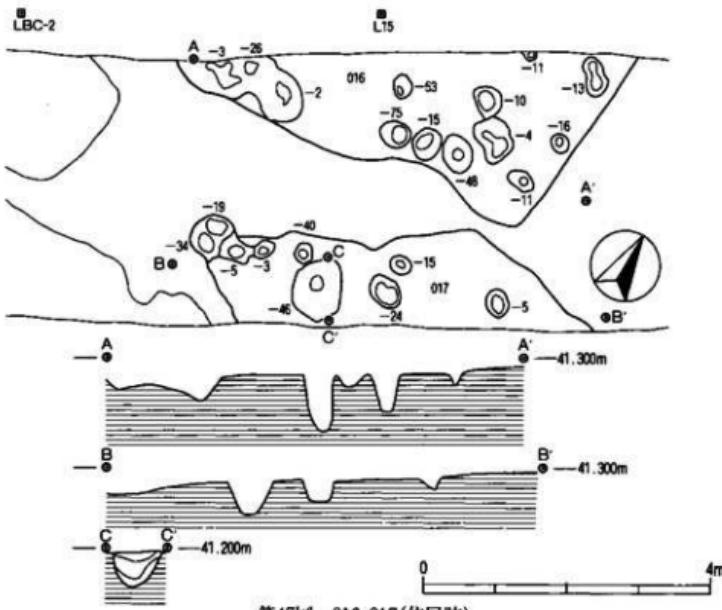
#### ① 016（第47図）

拡張部のL15杭のそばに位置する遺構である。本遺構の位置する区域一帯は、造園業者の植木の栽培用の畑地として用いられている。このため耕作土の攪乱が著しく、またソフトローム層が遺存しないので攪乱はハードローム層にまでおよんでいた。そのため本遺構周辺は非常に遺存が悪く、竪穴住居跡のほとんどは上面が破壊された痕跡と考えられる。017についても竪穴住居跡の痕跡であると考えられ隣接していた状態が考えられるが、調査時の所見からは新旧関係は区別できず両者の間隔からは、同時存在は不可能であることがうかがわれる。本遺構は北側が調査区外になり全容が調査できなかった。本遺構は壁の立ち上がりが検出されず、床面も検出されなかった。ハードローム層上面の確認面が平坦でなく凹凸をもち、ピットが13基ほど掘り込まれていたので本遺構の存在が確認された。遺構の想定される範囲は、ハードローム層の凹凸をもつ範囲とみられ、住居跡の掘り方とみられる凹凸とピットの存在する範囲が、ほぼ方形状に認められたので竪穴住居跡の痕跡であると判断した。踏み固められた床面は遺存せず、掘り方と柱穴の痕跡とみられる深さの異なるピット群が検出されている。形態は隅丸方形となるとみられ、調査区内の最大辺長5.4mを測る。ピットは不規則に存在し柱穴状の深さのものがいくつかみられるが、整った配置とは考えられない。炉は検出されなかったが、調査区外の北側に位置する可能性が高い。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

#### ② 017（第47図～48図）

拡張部のL15杭のそばに位置する遺構である。さきに016の項で述べたように、本遺構も攪乱によって上面を破壊された竪穴住居跡の痕跡であると考えられる。ただ016と異なり本



第47図 016・017(住居跡)



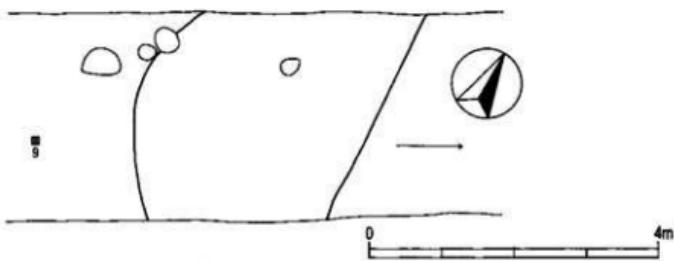
第48図 017出土遺物

遺構は、本来の形態・範囲が確認されるような状態とはみられず、形態・範囲についてはここではふれないこととする。床面はもちろん遺存せず掘り方の痕跡だけが認められ、炉も存在しなかった。ピットは不規則に複数のピットが存在し、柱穴状のもの、貯蔵穴状のものが認められるが位置関係等からみると整った配置とはいえず疑問が多い。

遺物は、壺の口縁の小片がかろうじて図示できた最大のものである。

### ③ 018 (第49図)

現遺部の9杭のそばに位置する遺構である。016・017と同様に竪穴住居跡の痕跡と考えられるが、両者とはかなり状況が異なる。本遺構の位置する周辺はソフトローム層が遺存しており、擾乱等によってローム層に掘り込まれた遺構が破壊されたのとは異なる。本来掘り込みが非常に浅く、ソフトローム層まで掘り込んで遺構を構築しなかったのか、ソフトローム層の非常に浅いところでまでしか掘り込まれていなかったために、耕作時の深い耕作によって破



第49図 018(住居跡)

墳され、遺構確認時には遺存しなかったものと思われる。床面は遺存せず、床下の掘り方とみられる少しの凹凸が一部認められて遺構の範囲とみられるような状況であった。炉も検出されず、柱穴等のピット類も検出されなかった。遺構の東側は直線状に区画され、西側は確認面の傾斜のため自然に消滅するような状態であったため、ここでは遺構の本来の形態は推定するしかないが、周辺の状況と直線状の東辺を呈することから隅丸方形の竪穴住居跡であったと考えておきたい。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

### 3. 溝

#### ① 021 (第50図・図版15)

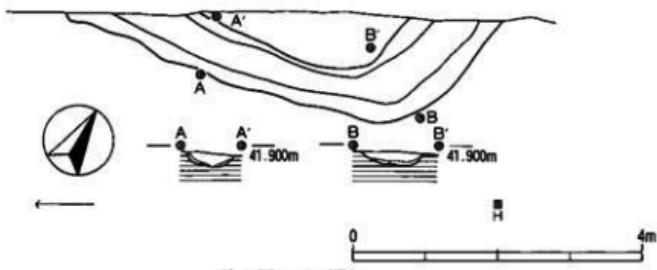
拡張部のH杭のそばに位置する溝状遺構である。北側は調査区外となるため調査ができず、全容は知ることができなかった。本遺構は、調査部分では幅約0.6~1.2mを測り、東西長約5m、南北長約1.6mが調査できた範囲である。東西辺と南北辺とは方向的には直交するが、交差する部分はゆるやかに交差し、隅丸方形の外形線を示している。溝の断面形態は浅い皿状を示し、深さ約0.2mほどの浅い溝である。覆土は黒色の有機土を主とした自然堆積の状態を示している。全体の形態は、一辺が5m以上の隅丸方形の外形を示すものとみられる。時期を知ることができるような遺物が出土しなかったので時期決定はできないが、歴史時代の方形周溝状遺構の一部とみられる。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

#### ② 022 (第51図-52図・図版15・16・17)

拡張部と現道部の両側にまたがって検出・調査された溝状遺構である。拡張部ではB杭、現道部では5・6杭のそばに位置する。遺構の南北の端は調査区外となるため調査できなかった。本遺構はほぼ東西方向に位置し、調査できた範囲は最大長さ約8mである。

022は西側では幅約0.8m、深さ0.6~0.8mを測り、断面形状は逆台形を示している。覆



第50図 021(溝)

土は黒色土を主としたもので、一部自然堆積状態であるが、部分的にロームを含む黒色土で埋め戻された可能性が高い。東側では形態がやや異なり、隅丸長方形状の擂鉢状掘り込みの間を直線状の溝で連結したような形態を示している。022と023は新旧関係を有し土層断面の観察からは、022のほうが古く、023の溝が後から掘り込まれている。これらの両溝は地境の溝として掘り込まれ自然に少しづつ埋まり、ある時期に改めて掘り込まれて2条の溝になったものとみられ、溝の用途は同じで掘り込みの時期差が認められるものと考えられる。これらの両溝は歴史時代のものと考えられ、現在の地境とは異なるが当時の地境の植木等が植え込まれたりした痕跡によるものが擂鉢状掘り込みではないかと考えられる。

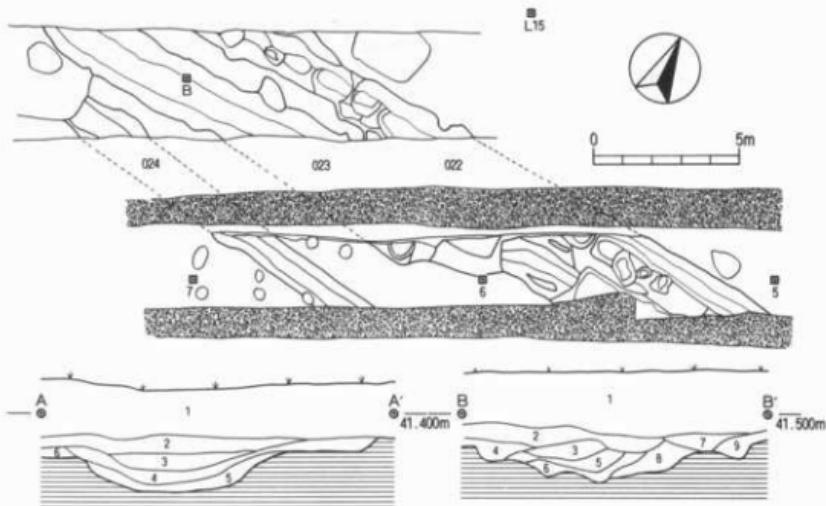
### ③ 023 (第51図～53図・図版15・16・17・26)

023は拡張部のB杭、現道部の5・6杭のそばに位置し、調査した長さは約7m、幅約0.8m、深さ約0.8mである。西側の拡張部では逆台形の断面形態を示し、ほぼ直線的な掘り込みの溝となっているが、東側の現道部では凹凸のある平面形の掘り込みで022と接して同一の溝の状態になっている。022が先に掘り込まれ、それがある程度埋まった時に新たに023が掘り込まれたものと考えられる。用途も022同様に地境の溝と考えられよう。

遺物は、古墳時代、近世のものが出土している。1は常滑焼の鉢の破片とみられ内面に明灰色の自然釉がみられる。2は常滑焼の壺の破片で肩の少し上部に自然釉が認められる。3、5は火熱を受けた砾で、火熱によるものか破損がみられる。4は古墳時代の土師器の壺で復元口径9.4cmを測る。ハケメが一部に認められる。

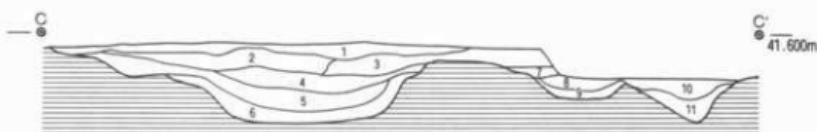
### ④ 024 (第51図～52図・図版15・16・17・18)

拡張部のB杭と現道部の7杭のそばに位置し、すぐ東隣には先に述べた022、023の2条の溝が位置している。本遺構はほぼ東西方向に位置し、調査した長さは約5m、深さは浅く約0.2mの浅い皿状の断面形を示している。覆土は黒色土主体の自然堆積状態を示している。この溝は022・023の地境の溝に伴う溝と考えられ、地境の大溝を022・023とみる



- 表土
- 黒褐色土 ローム粒を少し含む。
- 黒色土
- 黒褐色土 ローム粒をごく少し含む。
- 黒褐色土 ローム粒・ソフトロームを少し含む。
- 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を少し含む。

- 表土
- 暗褐色土 ソフトロームを少し含む。
- 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒を多く含む。
- 暗褐色土 しまがない。
- 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒を多く含む。
- 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒を少し含む。
- 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。
- 暗褐色土 ローム粒を少し含む。
- 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。



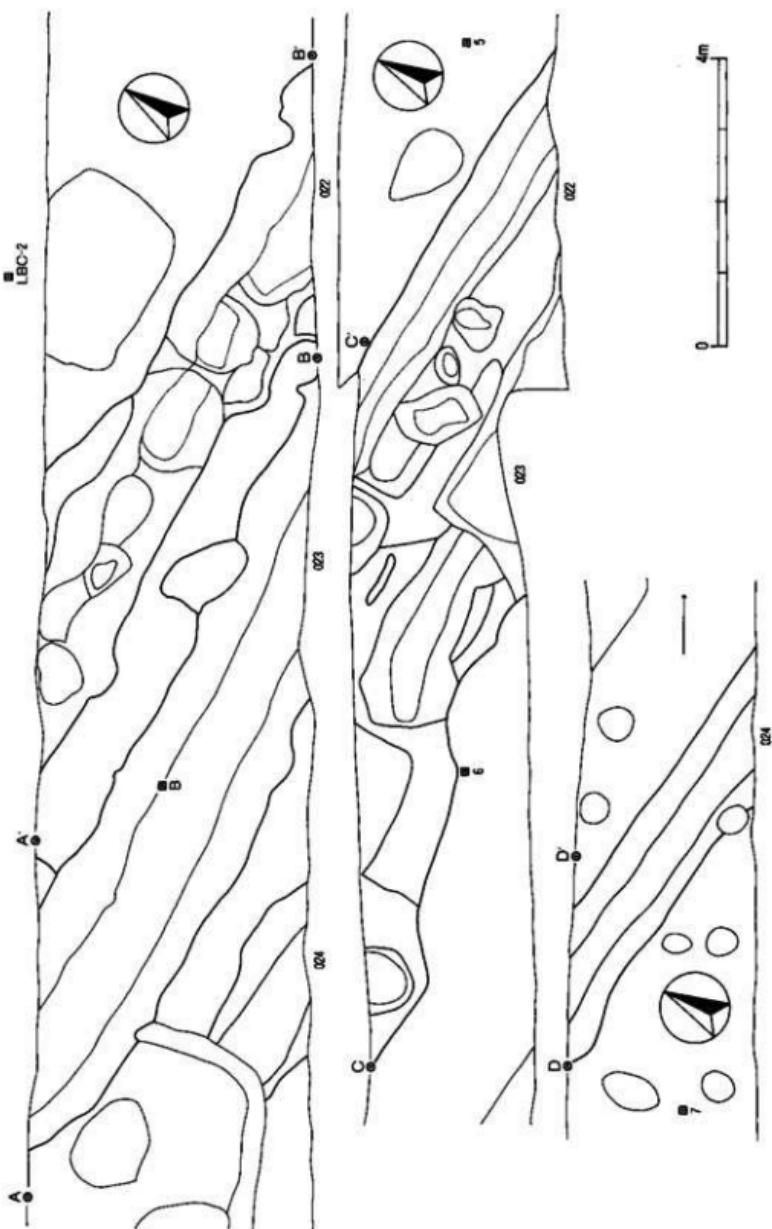
- 黒褐色土 ローム粒をやや多く含む。
- 暗褐色土 ロームブロック・ソフトロームを多く含む。
- 暗褐色土 ロームブロック・ソフトロームを多く含む。
- 暗褐色土 ロームブロック・ソフトロームを多く含む。
- 黒褐色土 ソフトロームを少し含む。
- 暗褐色土 ソフトローム・ロームブロックを多く含む。
- 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒を多く含む。
- 明褐色土 ロームブロック・ソフトロームの混合土。
- 明褐色土 ロームブロック・ソフトロームの混合土。



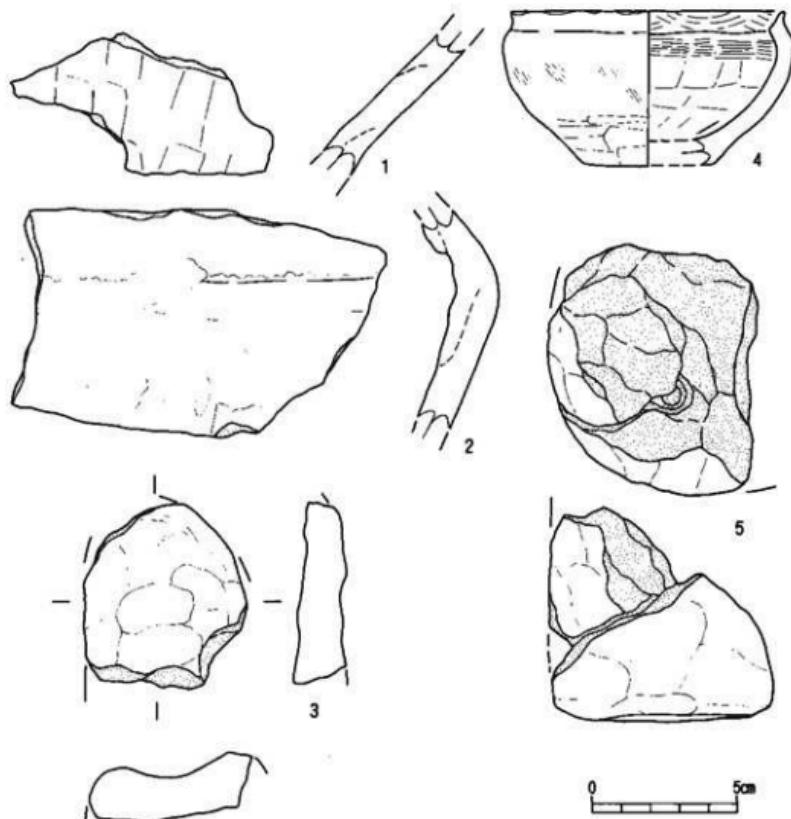
- 黒色土
- 黒褐色土 ソフトロームを少し含む。



第51図 022-023-024(溝)(1)



第52図 022・023・024(溝)(2)



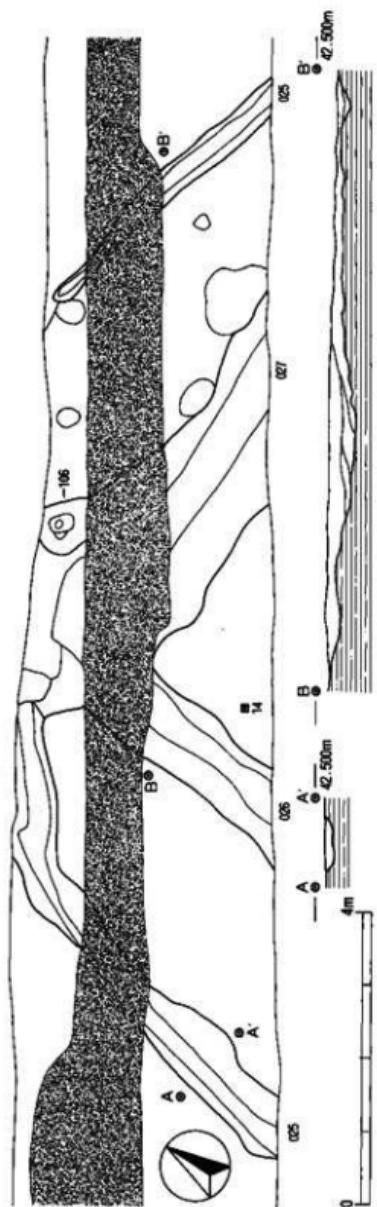
第53図 023出土遺物

と024はそれに付隨する南側の小溝といった用途が考えられる。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

##### ⑤ 025（第54図・図版18）

現道部の13・14・15杭のそばに位置する溝である。026・027の溝が隣接し、3条の溝で一組のものと思われる。南側は調査区外となり調査ができなかった。また現道部のやや北寄り中央にNTTのケーブルが埋設されており、1.6m～2mの幅にわたって調査ができなかった部分がある。本遺構は、西側と東側に分かれ、西側のものは調査区外の南からほぼ北に向かって調査区外まで約7mのび、幅約0.8m、深さ0.1mの浅い溝となっている。一方、それから約6m東の部分で、今度は北の調査区外との境に近いところで西からほぼ東へ向かって約4mで



第54図 025-026-027(溝)

南側の調査区外へとびる。この部分の幅は0.2m~0.4m、深さ約0.2mとなっている。この溝の西側のものは、北側の調査区との境界付近でやや東にゆるく曲がり、隣の026の溝へ接して区別がつかなくなってしまう。026もこの025と接する付近では形態が乱れてい。本遺構の西側の部分と東側の部分は、ほぼ直角に調査区外の部分で交差するような位置関係となっているようである。覆土は黒色土が堆積していた。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

#### (6) 026 (第54図・図版18・19)

現道部14杭のそばに位置する溝である。南側は調査区外のため調査ができず、北側も拡張部との空間があり北端部は調査できなかった。調査区の北端で025溝が接するが新旧関係はつかめなかった。本遺構は南からほぼ北へ南北方向にのびているが、調査区の長さ約4mではほぼ直角に東へ曲がり、今度は東西方向に直進して再び南側の調査区外へ向かってのびる。この南北方向のものを026、東西方向のものを027として説明を加えることにした。調査した長さは約4m、幅1m、深さ0.2mのやや深い逆台形状の溝である。北端の外側角付近には、径0.8m、深さ1.06mのピットがみられるが性格等は不明である。覆土は黒色土を主体とする。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

#### (7) 027 (第54図・図版18・19)

現道部14杭のそばに位置する溝である。西側

に025・026の2条の溝が位置し、北側に025の溝の東側部分が位置している。調査区の南側は調査区外のため調査できなかった。調査した長さ4m、上部幅1.6m、底幅0.5m、深さ0.4mの溝である。調査区の北側で南北方向にのびる026溝とほぼ直角に交差し、そこから東西方向の東側にのびて調査区の南側へと続いている。断面はゆるい逆三角形状を示し、覆土はローム土を主とし、北側から流れ込んで埋まったような状態であった。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

以上の025・026・027の3条の溝は、通路をはさむ溝であるとみられ、025と026の間、025と027の間が通路で、溝と通路は南から北へのび、東へ直角に曲がっているという状態を示していると考えられる。025と026・027の間の通路とみられる部分はやや硬く踏み固められたような状態で、断面図でみると他の遺構の確認面より0.2m近く下がっており、027と同じ黒色土が流入していた。通路の東・南側の内側にあたる溝はやや広く、西・北側の外側にあたる溝はせまくなっている。通路の幅は確認面で1.8~2.2mとなる。広い溝の南側は調査区内では、三角形に囲まれているが調査区外には、民家が所在しその境界がこの幅の広い溝に続いていることから、この幅の広い溝は宅地を取り囲む境界の溝であると考えられ、三角形部分は古くはこの家の所有地であったと考えられる。つまりその敷地の外側に、幅約一間の通路がめぐっていたものであろう。

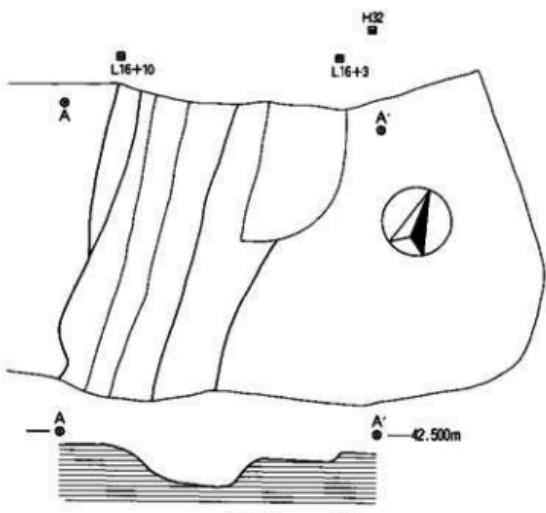
#### ⑧ 028（第55図・図版20）

拡張部L16+3杭のそばに位置する溝である。東側に033土坑が一部重複して位置する。両者の新旧関係については調査時の土層観察では確認できなかった。本遺構は、北側は調査区外のため調査ができず、一方南側は本来は現道部にも掘り込まれていたであろうが、深い耕作等のために遺存しなかったと考えられる。上部幅約2.6m、底幅0.3~0.4mを測り、調査できた部分の長さ約4mで、断面形は逆台形状を示し、確認面際ではさらに広く開くように掘り込まれている。覆土は黒色土を中心とした土で自然堆積の状態を示していた。

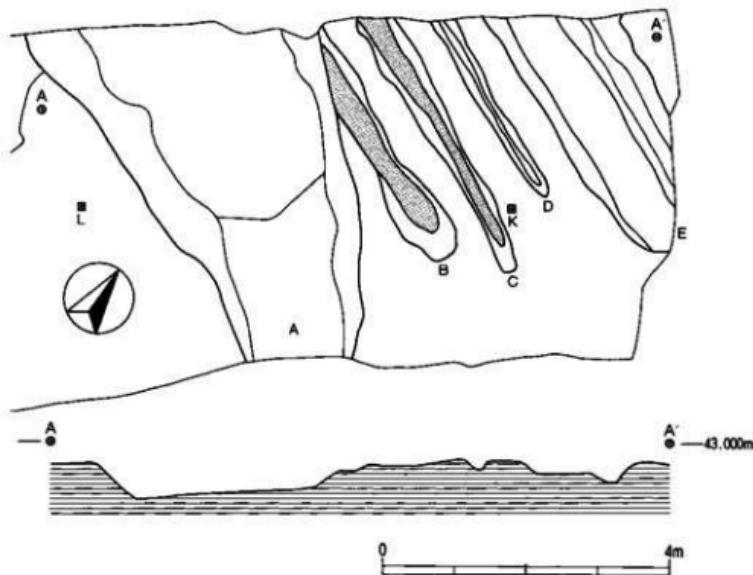
遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

#### ⑨ 029（第56図・図版20）

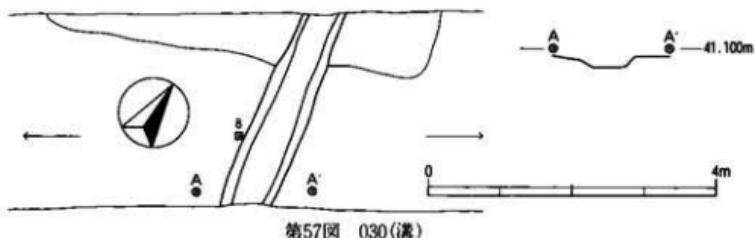
拡張部のK・L杭のそばに位置する溝である。西側には008竪穴住居跡が隣接する。北側は調査区外のために調査ができず、南側は現道部に隣接するが、現道部の工事の際に削平され遺存しなかった。以前は、ここに塚が築かれ忠魂碑が建てられていたようであるが、調査時までに他の地点に移転していたことは地形図から確認できた。しかしこの忠魂碑類も、さほど古いものでなく日露戦争と太平洋戦争のときのものなので、忠魂碑建設以前には、今回の調査で検出された溝が掘られ、道路として用いられていたのであろう。本遺構は地境に伴う複数の溝



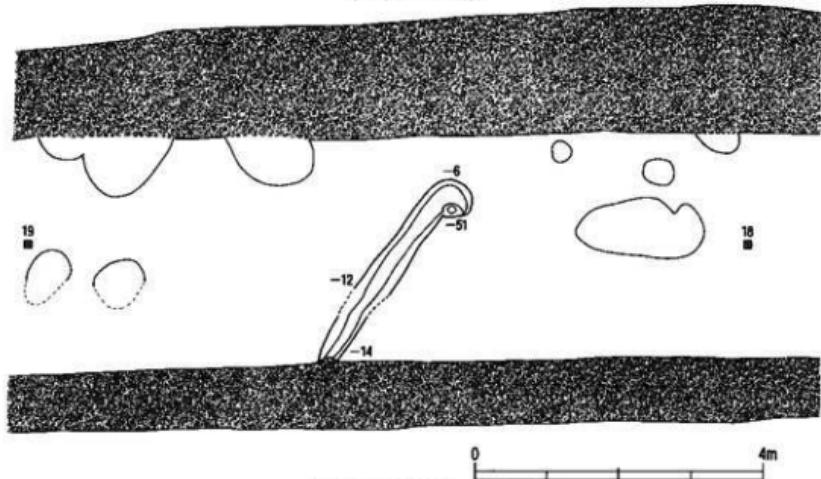
第55図 028(溝)



第56図 029(溝)



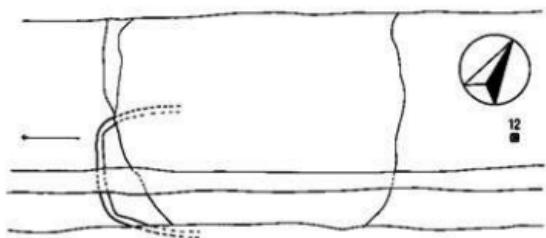
第57図 030(溝)



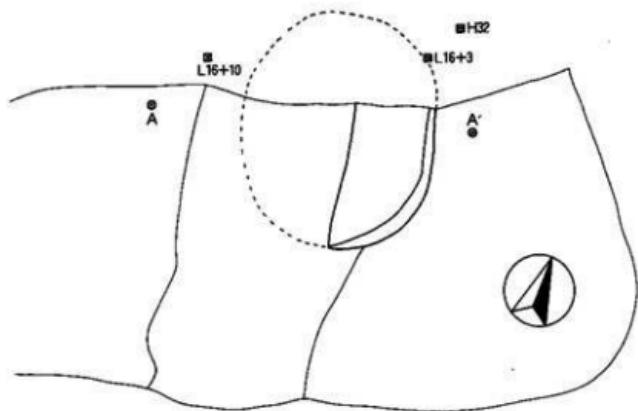
第58図 031(溝)

と考えられ、遺構確認時は約7mの幅の広い落ち込みであったので一つの遺構番号を付けて調査を行った。遺構を掘り下げていくと複数の溝が検出されたが、地形図などから地境とそれに伴う溝と考えられるので、ここではまとめて1つの遺構としてとりあげる。最も西側のもの(A)は最大幅4m～1.5m、調査した長さ4.8mで、深さ約0.5mの逆台形断面を示す。つぎの東側のもの(B)は幅約0.6m、調査した長さ3.6m、深さ約0.1mで非常に掘り込みが浅く、底面が硬く踏み固められていた。図にはスクリーントーンを貼ってその部分を図示しているが、この溝底の踏み固めは“わだち”的痕跡かもしれない。3番目のもの(C)は、幅約0.6m、深さは0.05mほどで非常に浅い掘り込みの溝である。この溝も底面が硬く踏み固められていた。4番目のもの(D)は、幅約0.4m、深さ約0.15mであった。5番目の溝(E)は、幅2.6mで2段に掘り込まれ、1段目が深さ0.2mで逆台形断面に掘り込まれ、東端でさらに幅0.7m、深さ0.2mほどを半円形に掘り込まれている。

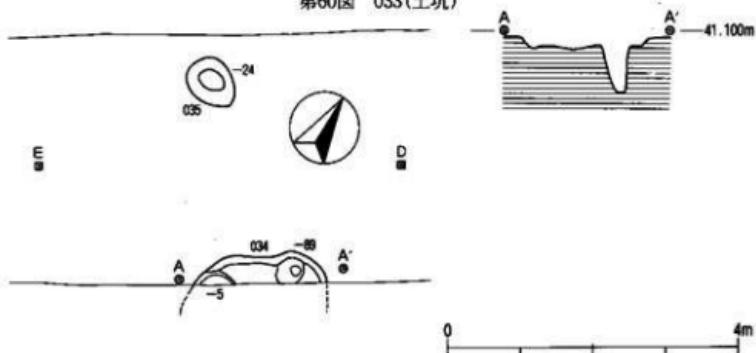
以上の5条の溝が、溝全体の西側と東側とを区画していたようで、なかに底面の硬く踏み固められた浅い溝もあり、溝というよりも道路状遺構の底面の一部分という状況である。



第59図 032(土坑)



第60図 033(土坑)



第61図 034・035(土坑)

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

#### ⑩ 030 (第57図・図版21)

現道部の8杭のそばで検出された溝である。南側は調査区外で調査ができず、北側は013竪穴住居跡と重複し、さらに拡張部方向へと向かうが拡張部では検出されなかった。013との新旧関係は、本遺構のほうが013より新しく掘り込まれている。調査した長さは約3m、幅約0.7m、深さ0.15mの浅い逆台形断面を示す溝である。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

#### ⑪ 031 (第58図)

現道部の18・19杭の間に検出された溝である。南側は調査区外となり調査できなかった。調査できた部分の長さは約3m、幅約0.4m、深さ約0.1mの浅い溝である。溝の北端がやや広く円形になりその端に径0.3m×0.2m、深さ0.51mのピットが掘り込まれていた。溝の覆土は黒色土が堆積していた。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

### 4. 土 坑

#### ① 032 (第59図)

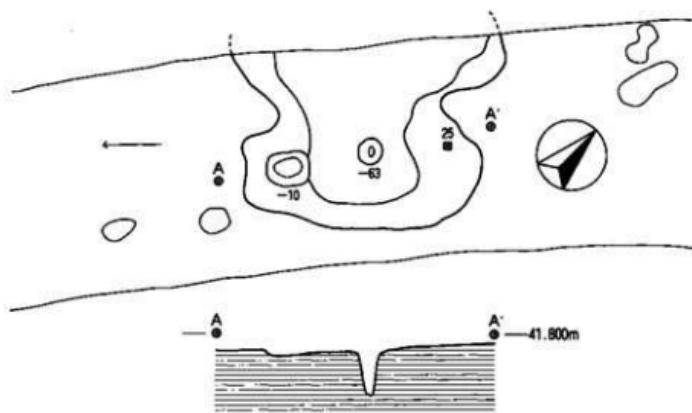
現道部の12杭のそばに位置する土坑である。東側は009・010竪穴住居跡と重複しているため遺構の全体は調査できなかった。さらに南側は調査区外にあたり調査ができなかった。調査できた範囲で遺構の形態をうかがうと、やや角ばった隅をもつ椭円形になると思われ、深さは約0.1mを測る。覆土の遺存状況が悪く、覆土の状態からは009・010との新旧関係は判断できなかった。底面は特に硬くなっている状態ではなかった。用途・性格等を特定できるような出土遺物もなく、性格・時期ともに不明である。

#### ② 033 (第60図)

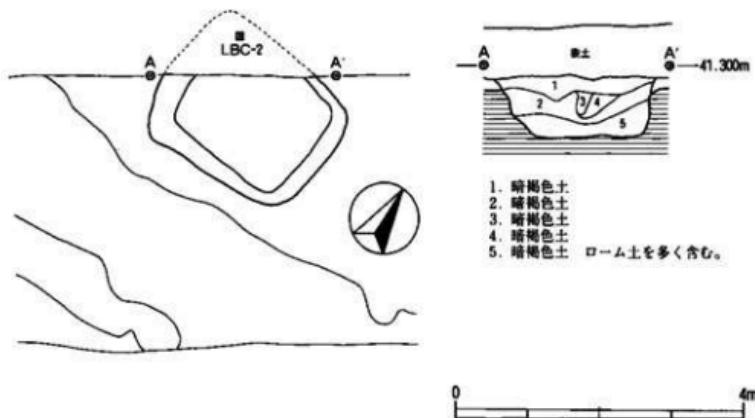
拡張部のL16+3杭のそばに位置する土坑である。本遺構の西側には溝028が重複しているが、調査時の覆土の土層観察では、両者の新旧関係は判断できなかった。北側は調査区外となり調査ができず、形態を推定すると小判形とみられる。復元推定の長軸長3.2m、短軸長2.7mとなるとみられ、深さは0.2mを測る。性格・時期ともに不明である。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

#### ③ 034 (第61図)



第62図 036(土坑)



第63図 037(土坑)



第64図 037出土遺物

拡張部のD・E杭のそばに検出された土坑である。南側は拡張部との境界のために調査ができなかった。北側には035土坑が位置しているが両者の関連は不明である。調査できた範囲でみると、円形の浅い掘り込みのなかに小さなピットが2基存在している。円形の掘り込みの深さは、約0.2m、円形の掘り込みの底からさらに小ピットが掘り込まれており、東側のものは直径0.4m、深さ0.89mの掘り込みで、西側のものは直径約0.6m、深さ0.05mほどの非常に浅いものである。033と同様に性格・時期ともに不明である。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

#### ④ 035（第61図）

拡張部D・E杭のそばに位置する土坑である。南側には034土坑が位置しているが、両者の関連は不明である。長軸0.7m、短軸0.6mのほぼ円形で、深さ0.24mを測る。覆土は黒色土を中心とした土であった。性格・時期ともに不明である。

遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

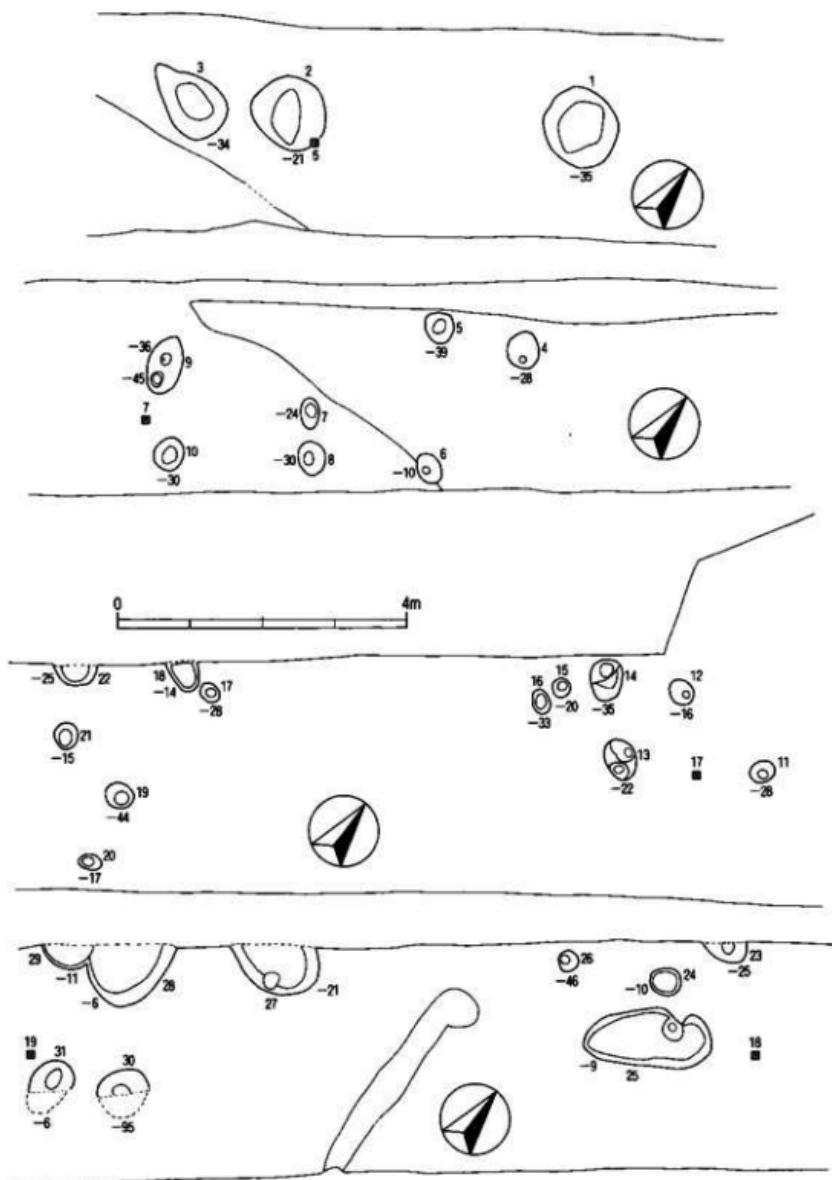
#### ⑤ 036（第62図）

現道部25杭のそばに位置する土坑である。北側は拡張部との境界によって調査ができなかった。調査できた部分でみると、南北長2.4m、東西長3.8mで中央部でいたんくびれ、瓢箪のような形ではあるが不整形である。現道の道路工事の際にソフトローム層を削平されており、遺構の遺存状態はよくなかった。そのため確認面からの掘り込みも浅く、0.1mほどの深さしかない。遺構のなかにピットが2基あり、1基は直径約0.4m、深さ0.63mを測る円形のものである。もう1基は西側の浅いくぼみで、長軸約0.6m、短軸約0.5mに0.1mほど掘り込んでいる。これらの底面は踏み固められたような状態にはなっていなかった。性格・時期ともに不明である。遺物は、図示できるようなものは出土しなかった。

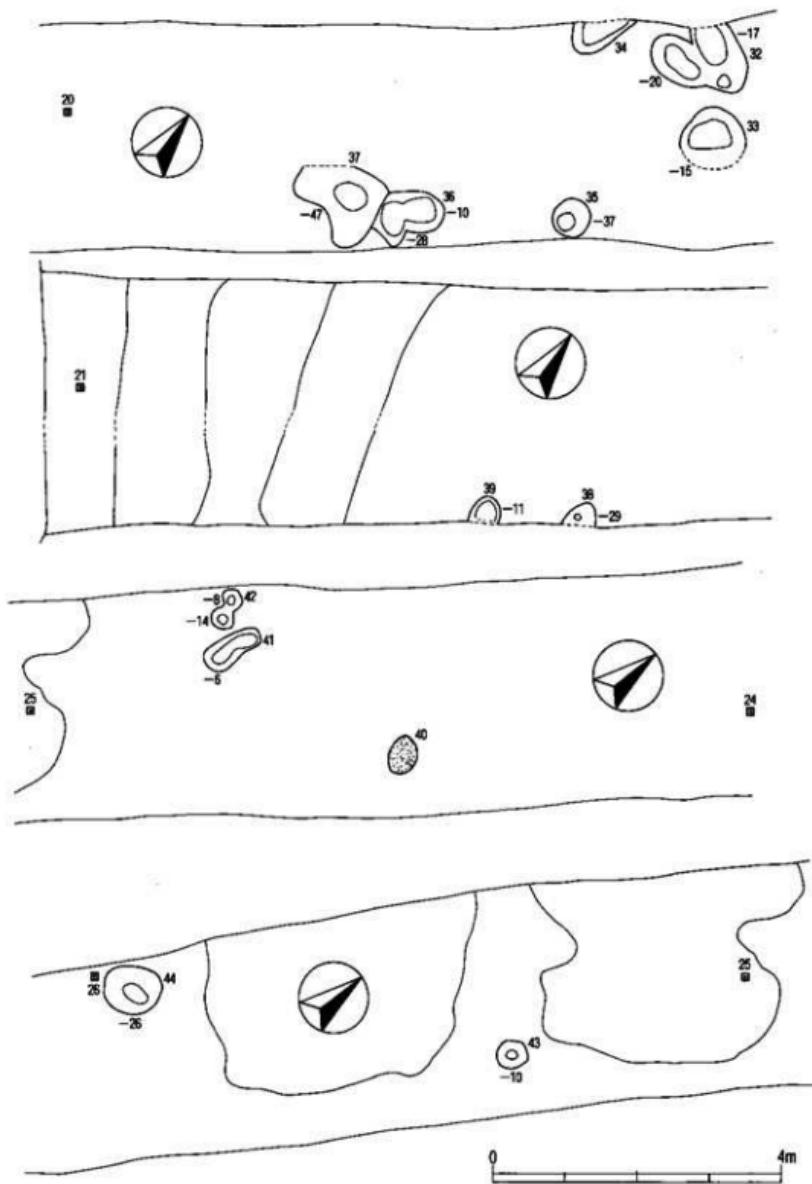
#### ⑥ 037（第63図～64図・図版21）

拡張部のL-B-C2杭のそばに位置する土坑である。北側は調査区外となり調査できなかった。西側には022溝が位置し、土坑の主軸の方向と溝ののびる方向とがほぼ平行であることから、これらの溝の存在を意識して掘り込まれた土坑であると考えられる。調査のできた部分から形態をうかがうことができ、長軸2.5m、短軸2.0mの長方形で、深さ0.7mを測る。覆土は黒色土を中心とし、ほぼ自然堆積の状態を示していた。底面は硬く平坦であったが、特に踏み固め・張り床といったことはなされていなかった。溝と何らかの関連があるとみられるが、特に時期・性格をつかめるようなものは出土していない。

遺物は、1の弥生式土器の胴部小破片で、覆土中の流れ込みであるとみられる。



第65図 038(ピット群)(1)



第66図 038(ピット群)(2)

## 5. ピット群

### ① 038 (第65図～66図)

現道部の5杭から26杭にわたって散在する44基のピット群を、ここでは038として取り扱う。これらのピット群は、調査範囲からでは掘立柱建物跡を構成するとみることもできず、またピット間相互に何らかの関連がみいだされるのでもなく、一つの遺構として取り扱うには無理があるかもしれないが、散在していることや性格・時期等も不明なものばかりなので、とりあえずここに038として取り扱う。これらのピットは、直径約0.2m～1mのほぼ円形のものが多いが、深さは0.05mほどの浅いものから1m弱のものまでさまざまである。また形態も円形のものが多いが、そのほかに不整形のものもみられ一様ではない。これらのなかには削平された竪穴住居跡の柱穴やピット類もあるだろうが、ピットの形態・配置・深さ等から検討するには、調査範囲がせまいため資料として不十分である。そのため個々については図示するだけにとどめ、詳しくはふれないことにする。

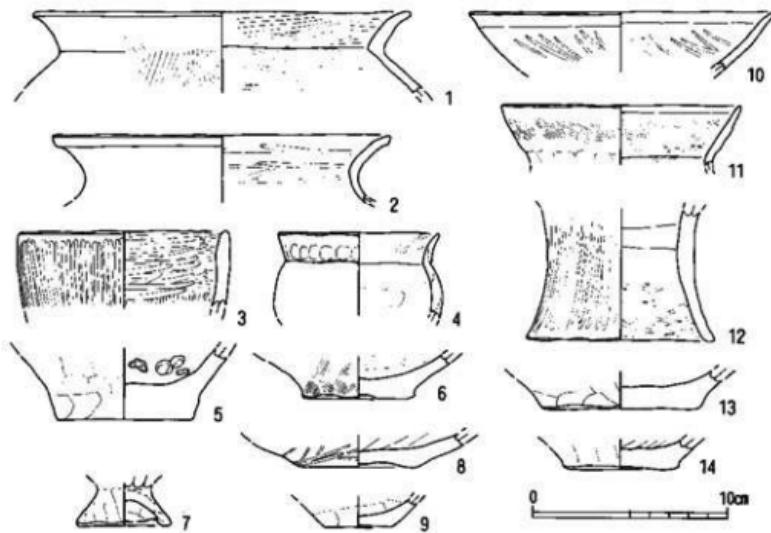
ただ、そのなかで40と番号をつけたものは(24杭と25杭の間に位置するもの)、掘り込みは確認されず長軸0.46m、短軸0.4mの範囲が赤く被熱し硬化がみられ、そこで火の使用がうかがえる状況を示していた。これは周囲のソフトローム土の遺存状況が悪かったことも考えあわせると、他のピット類が検出されていないが、竪穴住居跡が削平されその炉床だけが痕跡状に確認されたものとみることもできよう。

これらのピット群からは、図示できるような遺物は出土しなかった。

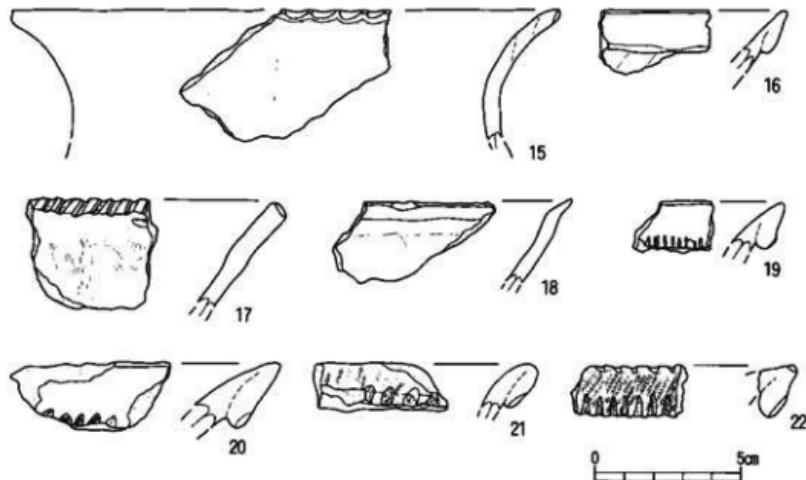
## 6. 表探遺物 (第67図～68図)

本遺跡検出の遺構は、時期不明・性格不明のものが非常に多い。時期の判明した遺構では弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡が大半である。したがって表面探集の遺物についてみても弥生時代から古墳時代にかけてのものがほとんどを占めている。調査範囲もせまく遺存状況があまりよくなかったために小片が多いが、ここではそれらのうちでは大きめで図示できたものをとりあげる。

1から14はそれらのうちでも大きめのもので1、2は壺の口縁部である。3は壺の口唇部、4は壺の上部である。5、6、8、9、13、14は壺もしくは壺の底部である。7は小形の台付壺の台部であろう。10は高壺の壺部、11は壺の口縁部とみられる。15から22は小片で、特徴的な口縁部を中心に図示している。15、17は口唇部にキザミをもつもの、18は碗の口唇部、16、19、20、21、22は複合口縁の折り返しがみられるものでキザミをもつもの、細かい繩文をもつもの等がある。



第67図 表採遺物(1)



第68図 表採遺物(2)

## VII まとめ

### 1. 先土器時代

今回の調査は道路の拡張工事に伴うもので調査区も非常にせまく、さらにそのせまい調査区を2回に分けて調査せざるをえなかつたことから、掘削深度の深い先土器時代の調査はその安全対策上からも非常に条件が悪く、満足な調査方法がとれなかつた。このため調査成果についても、かなり限定されたものとならざるをえなかつたことがおしまれる。しかしながら、このような条件のなかで、ある程度まとまつた遺物が検出された。これらの石器出土地点は大きく分けて第1ブロックから第5ブロックまでの5地点としてとらえることができた。このうち第1ブロック、第4ブロックは遺物の出土層序からさらに三つの小さなまとまりに細分されるので、それぞれ1a、1b、1cブロック、4a、4b、4cブロックとした。

これらを下層から時代順に並べてみると、最も深い層から遺物が出土しているのは、Ⅳ層から黒曜石、頁岩の剥片の出土した4cブロックで、黒曜石の剥片は楔形石器の可能性が指摘できる。次にその上層のVI層から遺物の出土しているのは、黒曜石の剥片、碎片が17点出土し、今回の調査のなかで最もまとまつた出土状態を示した1aブロックと、焼碟3点を出土した1bブロックがあげられる。この1aブロックと1bブロックは同じ層中からの出土で両者の距離が約2mと近いことから同一文化層内の所産とみられ、同時存在の可能性が高いものと思われる。また3ブロックもチャートの剥片類が2点検出されている。次にその上層のV～VI層から遺物の出土している調査区東端の1cブロックは黒曜石の剥片類が4点出土し、反対側の調査区西端の4cブロックでは、チャートの同一母岩からの剥片類3点、凝灰岩の剥片など石器の加工の可能性が高いブロックが検出されている。

今回の調査では最も上層にあたるⅢ～Ⅳ層のソフトローム層からハードローム層への境界付近では、4aブロックからチャートの石核1点が出土し、調査区のほぼ中央部にあたる5ブロックからは頁岩の剥片が1点出土している。このⅢ層からⅣ層にかけてのソフトローム層からハードローム層にかけてのクラック帶付近はその地域のハードローム層のソフトローム化の境界を示すものであり、クラック帶そのものは多地域との比較の際の層序の指標とはなりえない。

今回の調査では第2黒色帯中の4cブロックから最上層のソフトローム層下層の4a、5ブロックまでの間に大きく四つの遺物の出土する文化層を認めることができた。しかしながら、広い台地上のごくせまい部分の調査にすぎなかつたので、今後、本地域周辺の先土器時代の調査が進み、新たな調査成果が報告されるようになればより一層先土器時代の充明が進展するであろう。

## 2. 縄文時代

本遺跡の調査で最も遺構・遺物の検出の少なかった時期は縄文時代である。検出した遺構は陥穴2基のみである。そのうち1基はやや円形で開口部がやや広がるもの、あと1基はいわゆるTピットとよばれるもので、細長く幅のせまいものである。その他の遺構は土坑、竪穴住居跡、炉穴等一切検出されず、遺物についてみても石礫が3点ほど検出しているにすぎない。本遺跡一帯の縄文時代は、人間の生活行動が非常に乏しい地域となっていたようである。

本遺跡が先土器時代以降ふたたび人間活動の痕跡が明瞭になるのは、弥生時代以降になってからである。

## 3. 弥生時代から古墳時代

今回の調査で、遺構・遺物の中心となる時期は、弥生時代から古墳時代にかけての時期である。本文中では一応弥生時代、古墳時代と区分して記載したがはじめにことわったとおり、遺構の遺存状況が悪く、また調査範囲がせまいため時期を決定できない遺構が多い。ここでは本遺跡の位置する台地上の集落の中心時期とみられる、弥生時代後期から古墳時代中期までの時期をまとめて概観してみることにする。

本遺跡で弥生時代の竪穴住居跡は9軒検出されている。これらは弥生時代後期のもので、形態はほぼ小判形を示し、床面の中央やや北側に炉をもち、柱の柱穴は不明瞭なものが多い。出土遺物は、形態が知られるものが少ないが壺、甕が多く高壺・椀も少しみられる。壺の口縁部は折り返しのある二重口縁のものが多く、縱方向の隆帯の貼り付けや、キザミが施されるものが多い。地文には細かい斜縄文が施されている。壺等の体部中央部に施される文様は、細かい斜縄文による羽状縄文を主体とし、そこに沈線文を連続して山形に施している例が多い。文様帶と無文帶との境界は2条のS字状結節縄文によって区画され、無文帶はミガキが施されている。またそのミガキの無文帶には赤色の塗彩が施されているものもみられる。これらの土器群は弥生時代後期に特徴的にみられる施文方法である。

今回の調査区内は弥生時代の墳墓類は検出されなかつたが、これらの集落を構成する竪穴住居跡群とはやや距離をおいて、方形周溝墓に代表されるこの時期の墓域が遺跡の立地する台地上に存在することは十分に考えられる。たとえば本遺跡から約500mほど西に隔たった文脇遺跡の調査例をみると墓域は近接した台地上であることがうかがわれる。

古墳時代の遺構は竪穴住居跡4軒、溝2条があげられる。竪穴住居跡の形態は隅丸方形の直線的な辺とやや丸味をおびるコーナーとの組み合わせによるもので、ほぼ対角線上に柱穴の存在が認められ、南側の辺に貯蔵穴状の掘り込みをもつようである。規模もやや大形で一辺5m以上のものが考えられる。出土遺物は壺、甕、罐、高壺・鉢等でハケメのあるものは少なく、ハケメの後ミガキが施されている。一部壺等に赤色塗彩が施されている。これらの土器は古墳

時代中期のものとみられる。先述の弥生時代後期のものとはやや時期が隔たるので、弥生時代の集落が一時期中断し、古墳時代中期にいたるような状況がせまい調査範囲からはうかがえる。台地上において、集落の変遷に位置の移動が伴うために古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されないのであろうか。ただその点については西約500mに位置する文脇遺跡の調査例をここに少し紹介することで考察にかえたい。

文脇遺跡は、昭和63年から財團法人君津都市文化財センターによって公民館建設に先立って発掘調査が行われ、弥生時代から古墳時代中期の集落、墳墓群が検出されている。また一方その隣接地を当文化財センターが道路建設事業に先立ち発掘調査を実施している。これらの詳細は、整理作業を経て報告書の刊行を待たねばならないが、今までに知られている範囲では、弥生時代後期から古墳時代中期まで連続と集落が存在し、生活痕をとどめている。また墳墓群も検出され、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の土坑墓等が検出され、このうちで古墳時代前期とみられる土坑墓から小銅鐸が発見されて注目を浴びたところである。このように本遺跡の立地する台地上は、弥生時代から古墳時代にかけての有力な集落遺跡であり、本遺跡でもそれとあまり違わずに該期の集落遺跡の一部分とみられるような遺構が検出されているといえよう。ただこれらのなかでは時期により集落内の機能・役割の変遷が考えられ、したがって、たまたま本遺跡の調査範囲内でも検出される遺構に差があるものとしてあらわれたものと考えられる。

#### 4. 歴史時代以降

本遺跡の調査で明瞭に歴史時代と判明した遺構はほとんどない。竪穴住居跡・溝・土坑・ピット群、そのいずれをみても時期決定のできる遺物の出土した遺構はない。特に竪穴住居跡は、きわめて遺存状態の悪いものを時期不明として取り扱ったので歴史時代であるという確証があった訳ではない。そのほか遺構についてもまったく同様で、歴史時代というより時期不明の遺構というべきであろう。それらのうちで021の溝は方形周溝状遺構の一部分を検出したものと考えられる。ただこれについても出土遺物からの時期決定はできず、形態と状況からの判断によるものである。

溝についてみると、地境の溝であろうとした022・023・024・025・026・027・029は、土地の区画にかかわるものとみられ、一部には029のように通路もしくは道路の痕跡とみられる遺構も検出されている。022・023・024の3本の溝は地境の溝と考えられ、2条の大きい溝と1条の小さな溝の組み合はったものとなっているが、大きな地境溝の掘りなおしによるものが2条と、その境の西側に掘り込まれた小規模な溝との組み合わせによるものと考えられる。これらの溝は地境であろうとみられるが、現在の区画とは異なった方向にはしたことから現在との時間的隔たりを感じさせ、その溝の形態についても掘り鉢状

の掘り込みが連続することから、時期的にやや古いものと考えられそうである。馬土手・野馬堀の調査例を参考にすると、現在では全く痕跡をとどめないが、溝の東側に土壘状の高まりを伴っていた可能性もないとはいえない。一方、025・026・027の3溝は調査区外の民家の位置関係から宅地とその境界であることが判断できた。

土坑も、時期の判断できる遺物が出土しなかったこともあって性格も不明のままである。なお、なかには032・033のように竪穴住居跡に類似するような掘り込みで、時期的にもやや近いような状況が考えられる遺構もみられた。037は、022溝がすぐ西側をほぼ同方向にはることと、覆土の状態から022と同時期かそれに近い時期に、溝の存在を意識して掘り込まれたものと考えられる。

## 抄 錄

フリガナ	ソデガウラシカミイズミイセキ
書名	袖ヶ浦市上泉遺跡
副書名	一般県道横田停車場上泉線県単道路改良事業に伴う埋蔵文化調査報告書
卷次	1
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第231集
編著者名	鈴木定明 加藤正信 四柳 隆
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2
印刷所	大和美術印刷株式会社(千葉県木更津市潮浜2丁目1番10号)
印刷年月日	1993年3月15日
発行年月日	1993年3月25日

コ リ ザ ナ 所収遺跡名	コ リ ザ ナ 所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上 泉	袖ヶ浦市上泉	4 8 1	0 0 9	35° 24' 5"	140° 3' 10"	19910301 ↓ 19910531  19911101 ↓ 19911218	3,520m <sup>2</sup>	道路拡張

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上 泉	集落	先土器	遺物集中	5か所	黒曜石フレイク・砾等石器50点
		縄文	陥穴	2基	
		弥生	竪穴住居跡	9軒	後期弥生式土器
		古墳	竪穴住居跡 溝	4軒 2条	土師器
		歴史及び 不明	竪穴住居跡 溝 土坑 ピット	3軒 11条 6基 44基	

# 写真図版



遺跡周辺空中写真



先土器確認グリッド土層断面



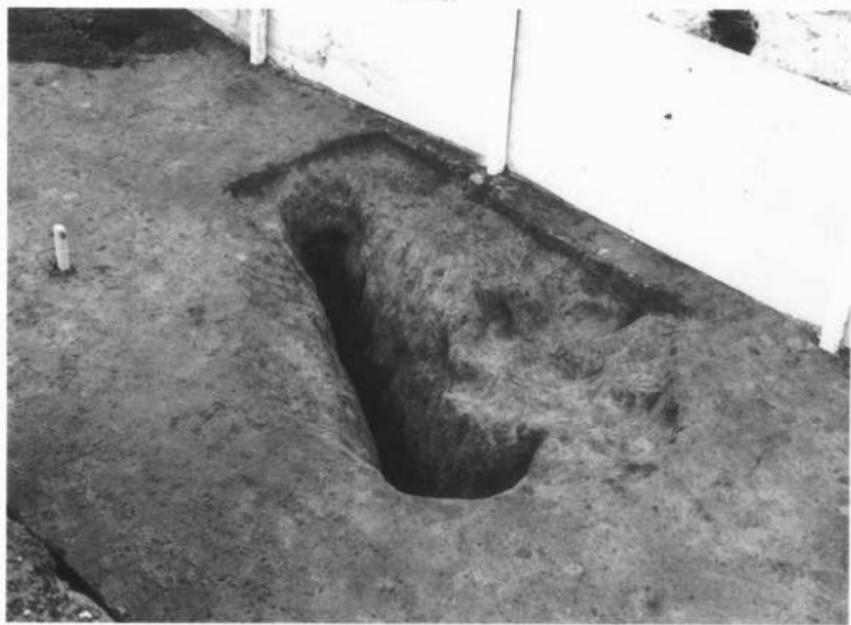
第5ブロック遺物出土状況



調査区発掘状況



001全景



002全景



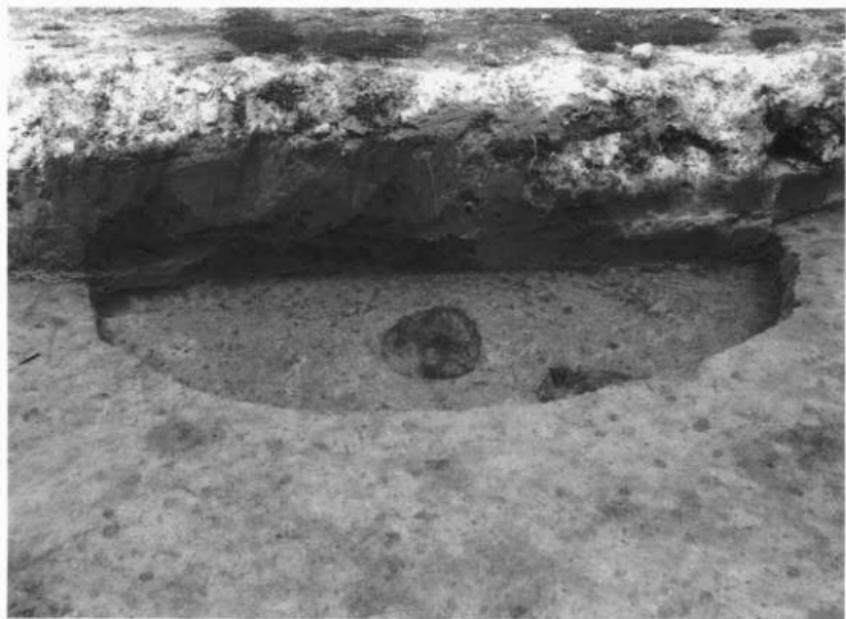
003全景



003全景



005(004)全景



005全景



006-007全景



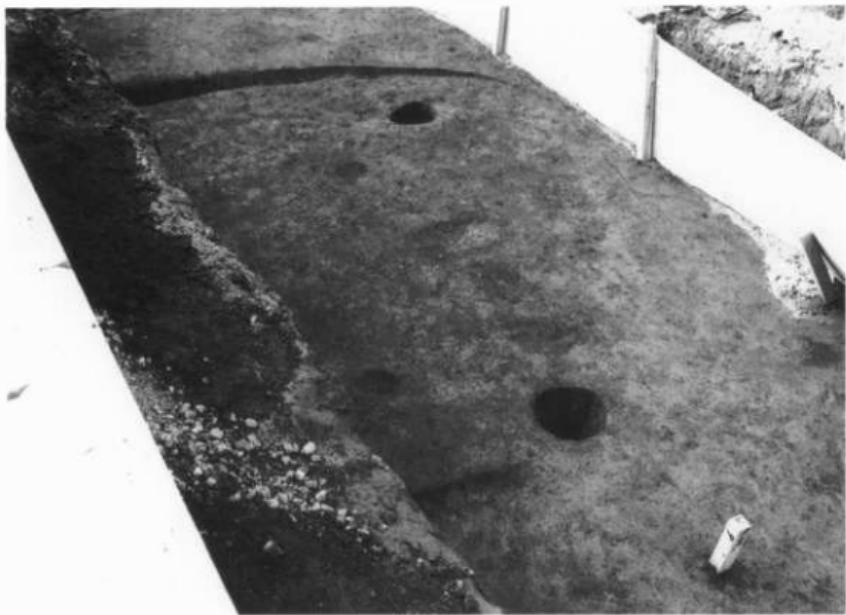
008全景



009-010全景



009-010全景



011全景



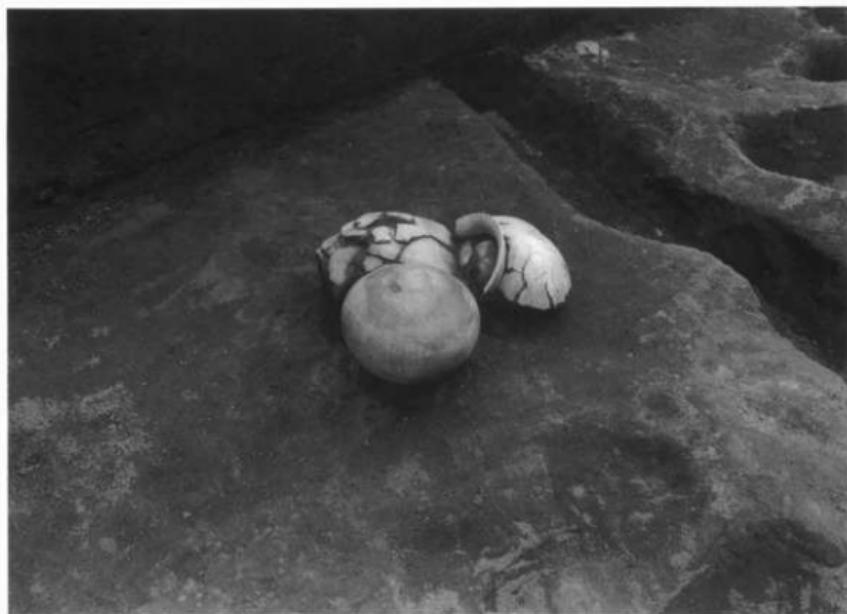
012-013全景



012・013全景



013南側部分



013遗物出土状况



013遗物出土状况



014全景



015全景



019·020全景



019·020全景



019



019全景



021全景



022·023北侧部分全景



022·023南侧部分全景



023北侧部分全景



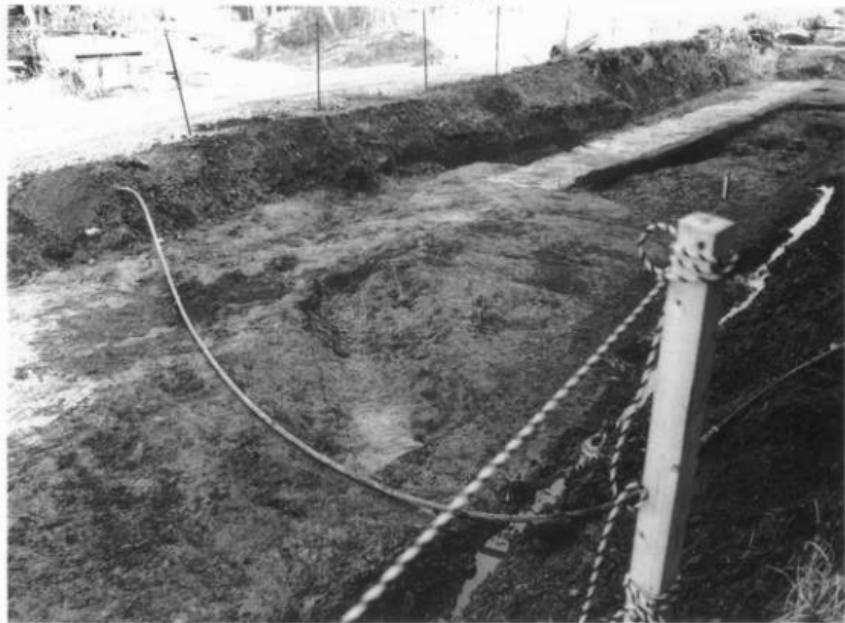
023北側部分全景



022南側部分全景



024南側部分全景



025全景



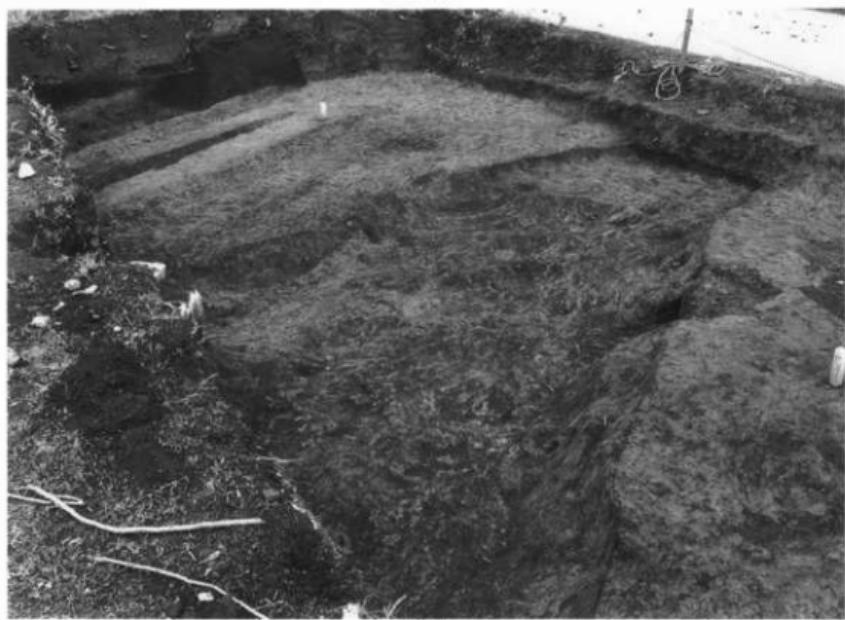
025・026・027全景



026・027全景



028全景



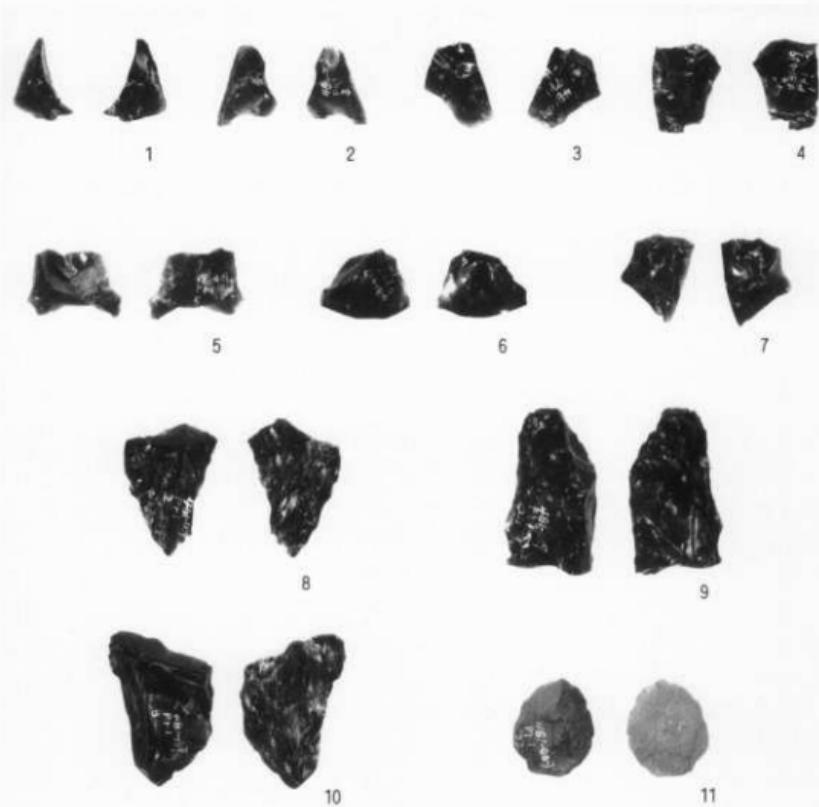
029全景



030全景



037全景

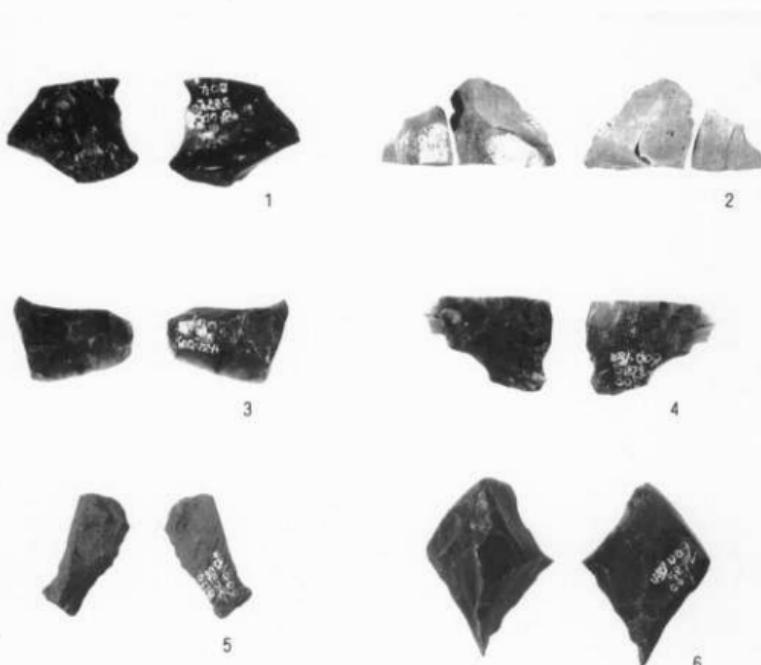


第1 ブロック出土石器

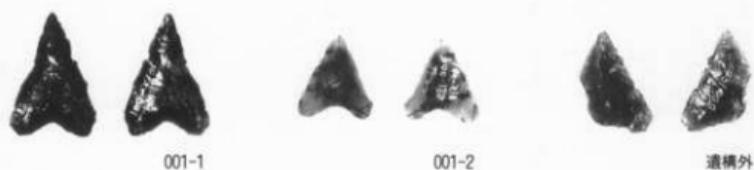


第2 ブロック出土石器

第5 ブロック出土石器



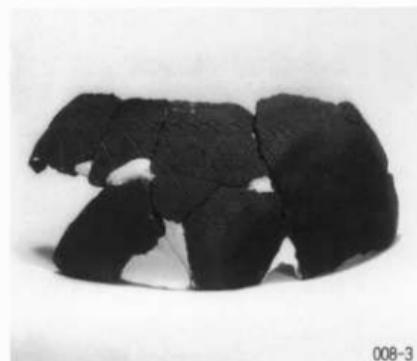
第4 ブロック出土石器



縄文時代出土石器



003-20



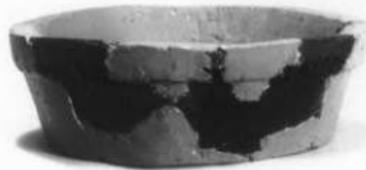
008-3



005-1



008-1



008-5

003・005・008出土遺物



013-3



013-4



013-5  
013出土遺物

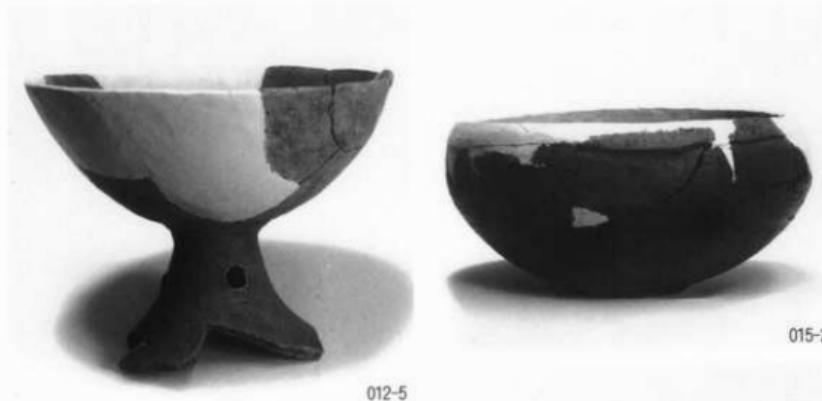


013-6



012-1

012-6



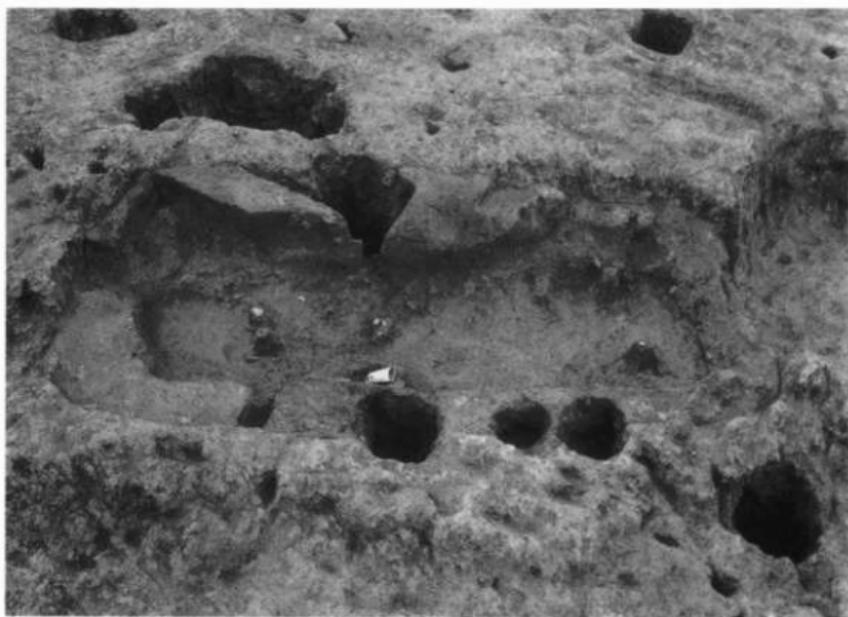
015-5

015-2



023-4

012-015-023出土遺物



(参考) 文脇遺跡小銅鐸出土土坑墓全景



(参考) 同出土小銅鐸

千葉県文化財センター調査報告第231集

平成5年3月15日 印刷  
平成5年3月25日 発行

袖ヶ浦市上泉遺跡

—一般県道横田停車場上泉線県単道路  
改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

発行 千葉県土木部  
編集 財團法人千葉県文化財センター  
印刷 大和美術印刷株式会社